文化財サービス発掘調査報告書 第31集

山科本願寺跡（寺内町遺跡）、左義長町遺跡発掘調査報告書

２０２４

株式会社　文化財サービス

例　言

1　本書は、京都市山科区東野舞台町20・21番地で実施した、山科本願寺跡（寺内町遺跡）、左義長町遺跡の発掘調査成果報告書である。（京都市番号　22S592）

2　調査は、根木建設工業株式会社による宅地開発に伴い実施した。

3　現地調査は、根木建設工業株式会社より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、和氣清章（文化財サービス）が担当した。

4　調査期間は令和５年12月25日～令和６年１月26日である。

5　調査面積は210㎡である。

6　本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面高度）である。

7　土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書の執筆は和氣が行い、編集は和氣、中西佳奈江、吉川絵里（文化財サービス）が行った。

9　現地での記録写真撮影は和氣が行い、出土遺物の撮影は写房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。

10　現地での重機掘削及び資機材のリースは株式会社Soidに依頼した。

11　調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）が保管している。

12　発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕田中慎一、小林一浩、上田智也、清須慶太、吉岡創平（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕田邉貴教、望月麻佑、森下直子、野地ますみ、神野いくみ、上野恵己、内牧明彦、甲田春奈、藤崎彩乃、下市紗耶香、（以上、文化財サービス）

13　出土遺物の年代観は、『古墳出現期の土師器と実年代：シンポジウム資料集』財団法人大阪府文化財センター　2006年
平尾政幸　「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年
中世土器研究会　『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　2022年
に依った。

14　現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。（敬称略）

一瀬和夫、市村慎太郎（公益財団法人大阪府文化財センター）

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯
1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の経過…… 1
3　測量基準点の設置と地区割り…… 3
4　整理作業・報告書作成…… 3

第Ⅱ章　位置と環境
1　立地と歴史的環境…… 5
2　既往調査　…… 8

第Ⅲ章　調査成果
1　基本層序…… 13
2　検出遺構…… 13
3　出土遺物…… 20

第Ⅳ章　まとめ
1　山科本願寺の調査…… 26
2　山科盆地の弥生時代～古墳時代前期の所相…… 30

図版目次

図版１　遺構　調査区全景（東より）
図版２　遺構　１．調査区全景（西から）
　　２．溝１（東から）
図版３　遺構　１．溝１　北側掘削状況
　　２．溝１　南土層断面
図版４　遺構　１．溝１－２、溝２　全景（北西から）
　　２．溝１－２　土層断面
図版５　遺構　１．溝２（南西から）
　　２．溝５（北から）
図版６　遺構　１．竪穴住居４（北から）
　　２．竪穴住居４　土層断面（北から）
図版７　遺構　１．竪穴住居４　床面除去
　　２．竪穴住居４　土器出土状況　土器①

図版８　遺構　１．竪穴住居４　土器出土状況　土器③
２．竪穴住居４　土器出土状況　土器②
図版９　遺構　１．竪穴住居４（北西から）
２．竪穴住居４　床面除去（北西から）
図版10　遺構　１．下層大溝（北から）
２．下層大溝（東から）
図版11　遺構　１．下層大溝東肩部　土層断面
２．下層大溝（西から）
図版12　遺物　１．竪穴住居４　出土遺物１
２．竪穴住居４　出土遺物２
３．竪穴住居４　出土遺物３
４．溝１　出土遺物
５．竪穴住居４　出土遺物４
図版13　遺物　１．下層大溝・溝１・溝２　出土遺物
２．溝１・溝２近世遺物、表採遺物

挿図目次

図１　調査地位置図（１：2,500）…… 1
図２　調査経過写真 …… 2
図３　調査区割・基準点配置図（１：200）…… 4
図４　周辺の遺跡（１：25,000）…… 7
図５　既往調査位置図（１：5,000）…… 10
図６　調査区南壁断面図（1：80）…… 14
図７　調査区北壁・西壁断面図（1：80）…… 15
図８　上層遺構平面図（１：200）…… 17
図９　下層遺構平面図（１：200）…… 18
図10　竪穴住居４　平・断面図（１：60）…… 19
図11　出土遺物（１：３、１：４）…… 24
図12　調査区周辺遺構配置図（１：400）…… 27
図13　山科本願寺跡　光照寺本寺内復元図（１：5,000）…… 28
図14　山科本願寺跡　洛東高校・西宗寺本寺内復元図（１：5,000）…… 29
図15　中臣遺跡　既往調査位置図（１：7,500）…… 31
図16　中臣遺跡　多角形竪穴住居平面図（１：200）…… 32

表目次

表１　既往調査一覧表 …… 11
表２　遺構概要表 …… 13
表３　遺物概要表 …… 20
表４　遺物観察表 …… 25
表５　山科本願寺略年表 …… 26
表６　中臣遺跡　既往調査一覧表 …… 34
表７　中臣遺跡　竪穴住居一覧表 …… 38

第Ⅰ章　調査の経緯

１　調査に至る経緯（図１）

京都市山科区東野舞台町20・21番地に、根木建設工業株式会社による宅地造成が計画された。当該地は山科本願寺跡（寺内町遺跡）および左義長町遺跡に所在する。開発に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）により試掘調査が実施された。試掘調査では、建物跡や溝とみられる遺構が検出され、古墳時代以降の遺構が良好に残存すると考えられる。試掘の結果を受け、文化財保護課は開発事業者へ発掘調査の指示を出し、開発事業者から、株式会社文化財サービスが令和５年12月20日に埋蔵文化財発掘調査委託を受け、令和５年12月25日から令和６年１月26日まで調査を実施した。調査面積は210㎡である。

２　調査の経過

今回の調査は宅地造成に伴い行った山科本願寺跡28次調査である。調査地は、山科本願寺跡の寺内を囲う土塁推定地の南に位置する。敷地周辺には土塁や濠跡は現存しないが、絵図や地形などから推定されている土塁位置の南西側にあたる。周辺では、1984年の下水道工事に伴い財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った立会調査で、室町時代の南北方向の濠跡（幅3.2ｍ、深さ0.92～1.24ｍ）が確認された。今回の調査は山科本願寺跡19次調査の北西に位置し、19次で確認された鋳造遺構や山科本願寺外郭の堀や土塁も含めた遺構の存在が想定された。

また、調査地を含む北には、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡である左義長町遺跡が広がっており、今までの調査では、竪穴建物や土坑などの遺構が発見されている。

調査区は敷地の中央西寄りに計画された道路用地であり、南北６ｍ、東西35ｍを調査区として設定した。

調査は上層現代盛り土約0.5ｍを重機による掘削を行い、それ以下を人力による掘削を行った。調

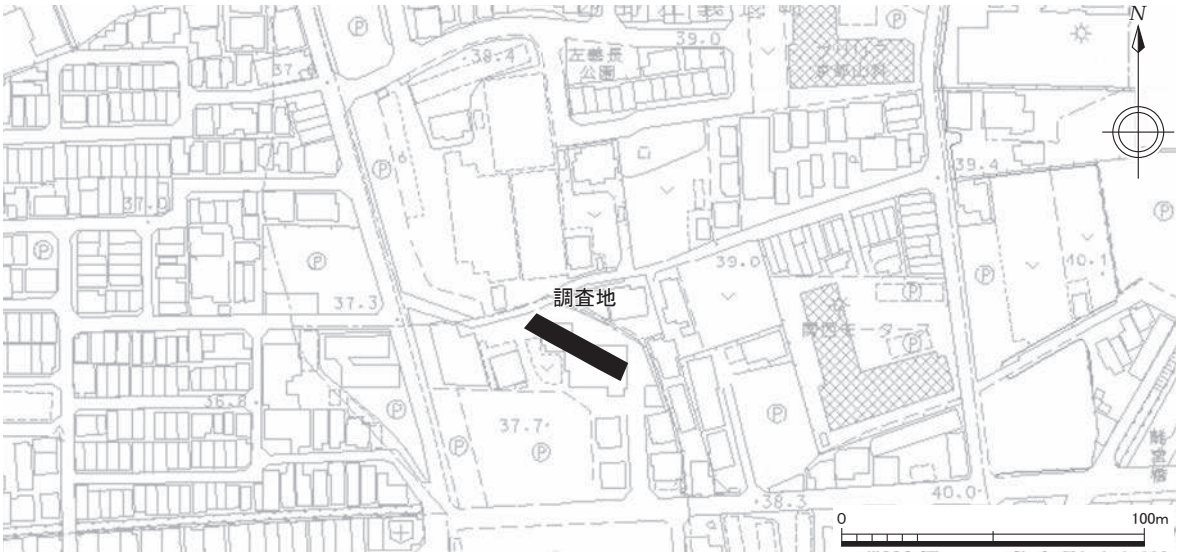


図１　調査地位置図（１：2,500）

1．調査区設定（北西から）

2．重機掘削（東から）

3．基準点測量（北西から）

4．発掘作業風景（東から）

5．作業風景（北から）

6．下層大溝掘削作業（北東から）

7．検証審査員　調査指導（西から）

8．埋め戻し完了（南から）

図２　調査経過写真

査区西側については、東側の基盤層である、マンガンが沈着する明褐色粘土層（25層）上面で検出を行い、中近世の溝が確認され掘削を行った。また、その下層にほぼ調査区中央部以西に、平安時代末から室町時代の深さ2.5ｍの大溝遺構が確認された。調査では、山科本願寺造営以前の古墳時代集落や平安時代の大溝が確認され、この地が古くから集落や様々な遺跡が広がっていることが明らかとなった。

適宜、文化財保護課の検査及び検証審査員である一瀬和夫氏の指導を受けた。実測図・写真による記録作成後、26日に現地作業を終了し、重機による埋め戻しを行った。

３　測量基準点の設置と地区割り

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にＴ.１、Ｔ.２を設置し、その２点からトータルステーションにより地区杭を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

Ｔ.１	X = -113,241.464ｍ	Y = -17,464.255ｍ	H = 37.443ｍ
Ｔ.２	X = -113,228.761ｍ	Y = -17,496.808ｍ	H = 37.527ｍ

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して４ｍグリッドを設定した。Ｙ軸にアラビア数字を西から東に、Ｘ軸にアルファベットを北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

４　整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元を行った。また、報告書の執筆は調査を担当した和氣、編集作業は中西、吉川が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

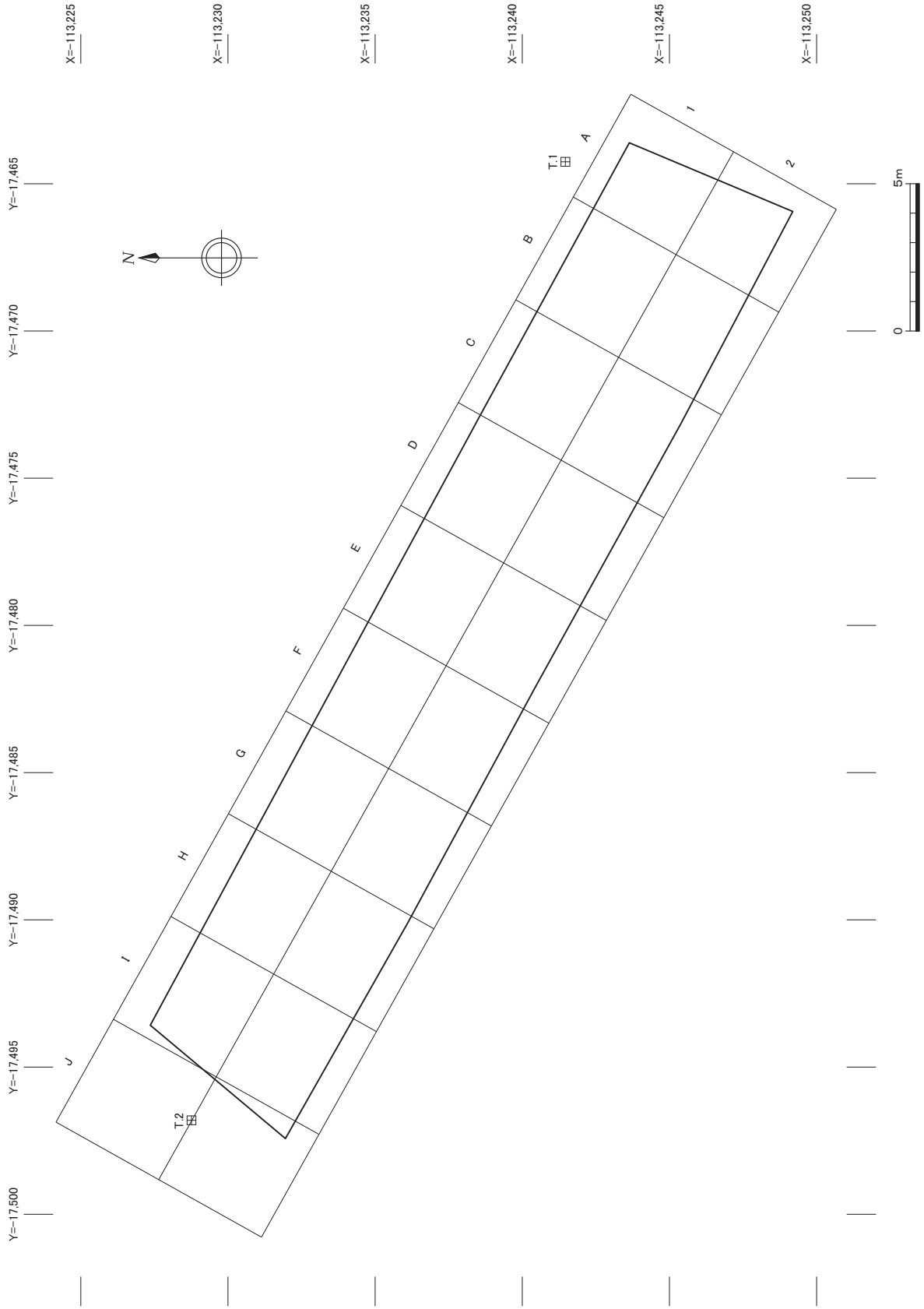


図３　調査区割・基準点配置図（１：200）

第Ⅱ章　位置と環境

１　立地と歴史的環境（図４）

山科盆地は三方を山に囲まれ、盆地中部に扇状地が大きく広がる。この扇状地上に複数の河川が南流する。盆地中央を流れる四ノ宮川、音羽川は安祥寺川と合流し、山科川となる。山科川は、南西向きから南向きへと流れを変え、盆地が狭くなる勧修寺で、盆地西端を流れる旧安祥寺川とさらに合流し、宇治市木幡で宇治川につながり、淀川へと流れ込む。山科盆地の大部分は扇状地であり、北東から南西へと緩やかに傾斜する。盆地中央部から、西には山科川と旧安祥寺川による氾濫平野が、東山丘陵まで広がる。

山科盆地の歴史は旧石器時代から始まり、中臣遺跡74次調査ではナイフ形石器２点、錐１点、石刃１点が出土するとともに、不定形の剥片が出土している。石器素材はサヌカイトが主体を占める。この石器類は後期旧石器時代に属する石器であり、この時期に活発な人の活動が確認できる。

縄文時代以降は、同様に中臣遺跡で早期の山形文様の押型文土器、後期の波状口縁の土器などが確認される。他に、芝町遺跡（後期中葉）、大宅遺跡（後期初頭・中葉、晩期後半）、中期末の住居跡が確認される日野谷寺町遺跡（中期末～後期初頭）、安朱遺跡（中期から後期初頭）などがある。中臣遺跡を除き、多くの遺跡は、山科盆地の縁辺部に小規模な集落として点在する。

山科盆地最大の集落跡として中臣遺跡がある。この遺跡は河川に挟まれた台地上の好立地であったことから、縄文時代では中期中葉から後期前葉、後期後葉から晩期と継続する集落が確認される。

こうした傾向は弥生時代でも同様である。中臣遺跡では95次をかぞえる発掘調査が実施されており、弥生時代前期～中期の遺構・遺物が23次・73次・74次で確認される。中期に造営が開始された方形周溝墓群は後期まで継続され確認されるが、多くは弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置づけられる。方形周溝墓上面で弥生時代後期末の竪穴建物が確認されることから、弥生時代後期初頭に一旦集落が廃絶した後、一定の時間差を有して弥生時代後期末から新たに集落が営まれることがわかっている。こうした弥生時代後期～古墳時代前期前半の多くの竪穴住居が確認される中臣遺跡であるが、竈を伴う古墳時代中期から後期の住居も広く遺跡の中で確認されるようになる。

山科盆地の古墳時代は前期に中臣遺跡という大規模な集落跡が確認されるが、大型の前方後円墳は、盆地南端に黄金塚１号墳、２号墳（全長120m、後円部径60m、前方部幅50m）などがある。２号墳は後円部が陵墓に指定されており、詳細は不明であるが、全長120ｍの前方後円墳であり、後円部に円筒埴輪列や鰭付き円筒埴輪が確認されている。この前方後円墳は北山城最大である。古墳は伏見区桃山遠山町に所在し、中臣遺跡とはやや距離が離れるものの、山科川流域として関係を検討する必要がある。山科盆地は古墳時代中期以降になると、小規模な周溝を有する古墳が中臣遺跡内で点在して確認される。中臣遺跡がこの時期に中小円墳の墓域として造営される。こうした小古墳で古墳群を形成する状況は、宇治北陵に含まれる木幡古墳群や稲荷山古墳群なども存在し古墳時代中期の群集墳が山科川流域などに点在することは今後の山科川流域の遺跡を検討する上で重要な

課題である。

古墳時代後期になると、中臣十三塚や旭山古墳群のような横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が西側丘陵で確認される。中臣十三塚は、現在までの発掘調査で小規模の横穴式石室が５基確認され、現存する当該期の古墳は宮道古墳と稲荷塚古墳の２基のみである。調査で確認された５基の横穴式石室の年代は６世紀後半から７世紀代の横穴式石室である。古墳が確認された地域の旧地形は、宅地造成により大きく改変されているが、低い丘陵上に造営された横穴式石室の古墳である。70次調査で確認された横穴式石室は、南側に開口部を有する片袖式石室の古墳であり、南側斜面の緩やかな丘陵上に所在した古墳群であると推定される。

山科盆地の奈良時代以降の遺跡としては、大宅廃寺、山階寺が存在する。こうした古代寺院は、後の藤原氏の前姓の中臣氏がこの地の有力豪族として存在したことと大きくかかわると考えられている。昭和33年の大宅廃寺第１次調査では南門・中門・金堂・講堂の四つの建物が確認された。近年、東南に塔跡と考えられる建物が確認された。この大宅廃寺は中臣鎌足が造成した山階精舎（寺）の可能性も存在する。

平安時代の遺跡は前段階から続くところが多いが、盆地の広さからみると相対的に遺跡数は少ない。しかし、文献資料には後白河院の別荘であった沢殿が存在し、上御所・下御所、無量光明院が築かれた記録が存在する。後白河院没後その所領地は、丹波局に譲渡され、その後に藤原教成に相続された。こうした文献などからみると山科小野荘（大宅・東野・西野・西野山）でまとまった平安時代以降の遺跡が確認される可能性が高い。

鎌倉時代以降の遺跡としては、安朱遺跡、室町時代の山科本願寺がある。鎌倉時代に入り山科を家名とした藤原教成に伝領され、山科小野庄となる。山科の地は山科七郷（野村・大宅里・西山・火山・御陵・音羽・安祥寺）と呼ばれ、自治的に運営される地域であった。この山科七郷の一つ野村の地を本願寺に提供したのは、海老名五郎左衛門（法名：浄乗）とされる。彼は後に山科本願寺跡地西側に西宗寺を建立するなど、惣村と後の本願寺とのかかわりを色濃く示す。

山科本願寺は、山科郷野村に文明10年（1478）、本願寺八世宗祖の蓮如上人によって造営が開始された浄土真宗の寺院である。文明15年（1483）までには、主要な堂塔が完成していたとされる。寺内は本堂など主要伽藍のある「御本寺」、宗主一族や有力坊主衆が居住していたとされる「内寺内」、門徒やその家族が住まう「外寺内」の３つの地区に分かれ、それぞれを土塁や堀を巡らす郭をなしていた。各郭は自然地形や河川を利用して、防御性を兼ね備えた寺内町を形成した。この山科一帯は、この時期急速に門徒を拡大し、本願寺の経済基盤を支える町として発展していった。この本願寺寺内町には商業や工業など様々な層の人々が居住し、応仁の乱以降疲弊した京に対し、当時の公家の日記に「荘厳さながら仏国のごとし」と記述されるように急速に発展した。しかし、本願寺建設後、天文元年（1532）８月に、管領細川晴元が率いる法華宗や近江守護職六角定頼の連合軍により総攻撃を受け、寺内町は焼失した。

その後、本願寺は大坂へ移転し、最終的に京都七条の地へ落ち着く。

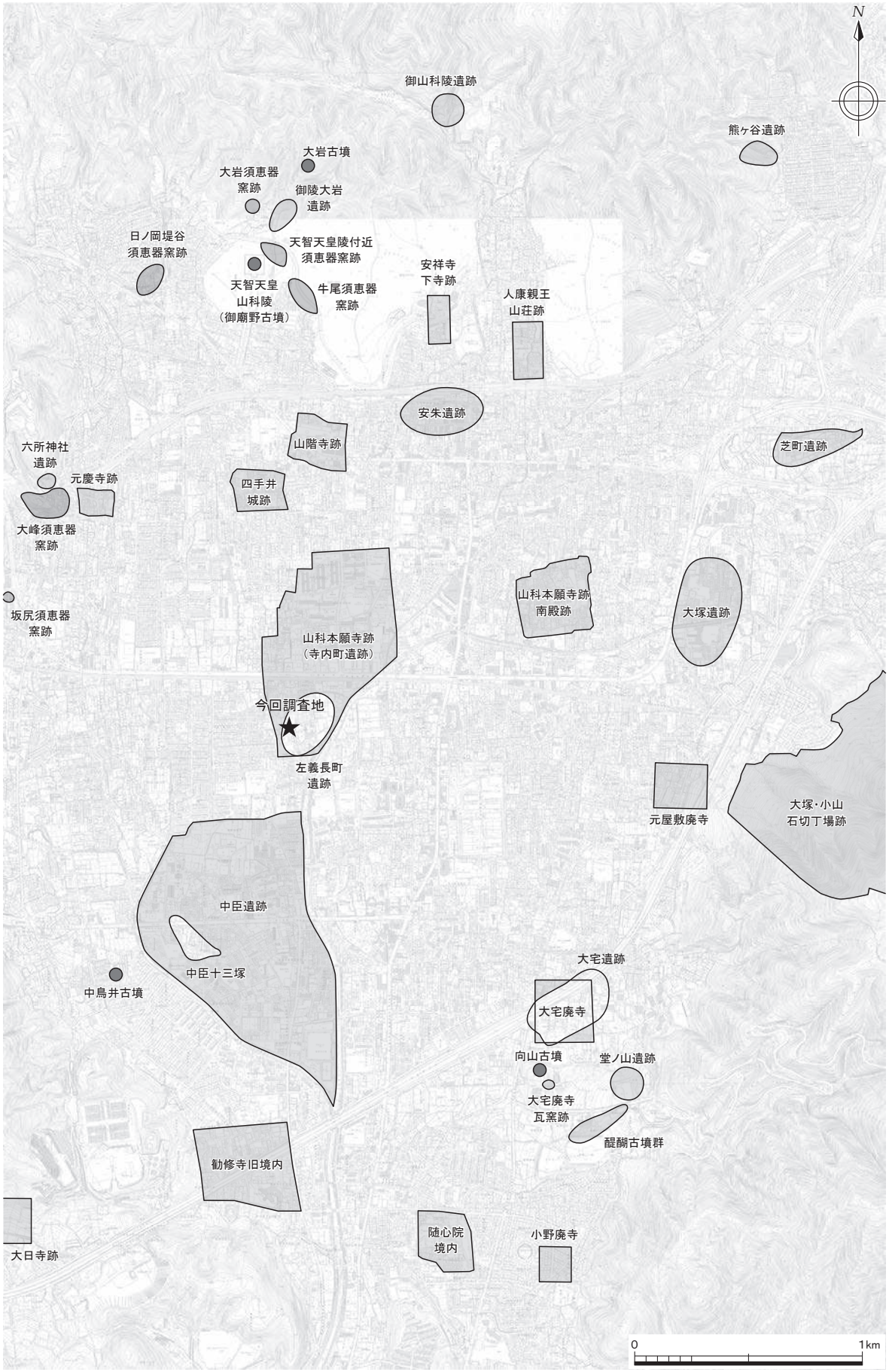


図４　周辺の遺跡（１：25,000）

２　既往調査

調査地周辺では、発掘・試掘・立会調査が行われている（図５、表１）。今回の調査地が属する、左義長町遺跡・山科本願寺跡の主要な調査成果をみる。左義長町遺跡の範囲内で行われた調査は11例あり、その大半は立会調査である。最大の成果は、1984年に行われた下水道工事に伴う立会調査（図５）である。周辺は広く山科本願寺段階の遺構が存在していたが、その下層で、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構が確認された。調査では竪穴建物や土坑が検出され、弥生時代後期～古墳時代早期の土器が出土した。この調査によって、部分的に古い時期の遺跡が残り、遺跡が広がっていることが確認された。図５－11地点では、古墳時代とみられる土師器片が出土した。また、図５－10地点では、黄褐色砂泥の地山相当層を切り込む時期不明の流路の東肩が検出されている。また本調査区の南に位置する図５－30地点では平安時代の掘立柱建物や土坑・溝が確認された。この土坑からはフイゴの羽口や鋳造にかかわる遺物が確認され、古墳時代以降に製鉄にかかわる遺構が存在することが確認された。

山科本願寺の遺構は、今回の調査地北側一帯と国道１号線北側一帯で行われた発掘調査でまとまって検出されている。図５－28～35地点では、遺存していた土塁と御本寺南西角付近の様子が明らかとなった。特に令和２年度に調査が実施された35地点（以下図５参照）では、初めて御影堂地内の調査が実施され、34地点と同様に土塁形状や構築法や土塁外側の濠の形状・規模を明らかにされた。特に御影堂想定地内で初めての発掘調査が実施され、山科本願寺期の土坑や井戸、整地土が確認された。この確認された整地土は山科本願寺の焼き討ち前とされ、山科本願寺寺内造成に大規模な整地を行われたことが初めて確認された。御影堂は、本願寺にとって最も重要な施設であり、造営直後に建立が始まり、焼き討ちまで存在したとされる。堂の規模は明らかではないが、少なくとも七間以上の建物と想定される。

31、32地点の調査では、本願寺門主の私的空間の「宗主空間」内の様相が確認された。その調査結果から、御影堂と阿弥陀堂が南北に並び、両堂の西側に、炊事関連施設、石風呂遺構群、南東や南西に複数の建物や庭が検出された。また、御本寺内は絵図などでも確認されているように複雑に屈曲した堀と土塁が、御本寺・内寺内・外寺内で構成されることが確認された。これは創建当初からのものではなく、変遷を経ながら形作られていることが確認された。特に土塁構築土の下層に広がる整地土から、４条の堀跡が検出され、「應仁」「なむ」の墨書された土師器皿が出土するなど初期の山科本願寺の姿が確認される。27地点の調査では、御本寺の中心部の遺構が確認され、北半では一段高まった箇所で井戸跡が確認された。井戸内から大量の炭化米が出土することから炊事施設にかかわる遺構が周辺にあったことが確認される。南半には建物、石風呂、竈などの風呂関係遺構が確認され、御本寺内にあったとされる「土呂殿」の可能性が極めて高い。

こうした石風呂施設は、『本願寺作法之次第』に風呂の様子が具体的に記され、「毎月１回、25日と28日の月替わりで風呂が立てられ、風呂の入口は二つ、宗主を指す御住持や五山の長老等身分の高い人が使う入口と、それ以外の者が使う入口が区別された。また、宗主や客人以外にも本願寺の一門である一家衆や重臣の御内衆が入り、一家衆は垢を掻かせるために家来を一人連れて入っ

た」と記され、宗門の活動の中で入浴が重要な役割をもっていたことが伺える。このように山科本願寺内の御本寺内の状況は24次にわたる調査でその実体が徐々に明らかになってきている。

御本寺の外郭を大きく取り巻く、内寺町・外寺町地区の調査は、現在まで２、４、５、６、７、12、30の７地点にて行われている。これらの調査では土塁や濠、切り通し、石列、鍛冶場遺構が確認された。30地点では山科本願寺期の遺構は確認されず、平安期を中心とした遺構、遺物が確認される。

参考文献

杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道 1965年

岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集　1985年

「山科本願寺跡１」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

「山科本願寺跡２」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

「山科本願寺跡」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年

百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年』京都市文化観光局 1988年

百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年

久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年

久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局　1990年

本弥八郎「山科本願寺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年

永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡１」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年

近藤知子「山科本願寺跡２」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年

吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成10年度』京都市文化市民局　2000年

長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』京都市文化市民局　2000年

吉崎　伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成12年度』京都市文化市民局　2001年

小檜山一良・清藤玲子・柏田有香「山科本願寺跡（１）（２）（３）（４）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局　2006年

柏田有香『山科本願寺跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005年

長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局　2006年

家原圭太「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成19年度』京都市文化市民局　2008年

堀　大輔「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成20年度』京都市文化市民局　2009年

柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成23年度』京都市文化市民局　2012年

柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年

馬瀬智光・奥井智子『山科本願寺跡発掘調査総括報告書』京都市文化市民局　2022年

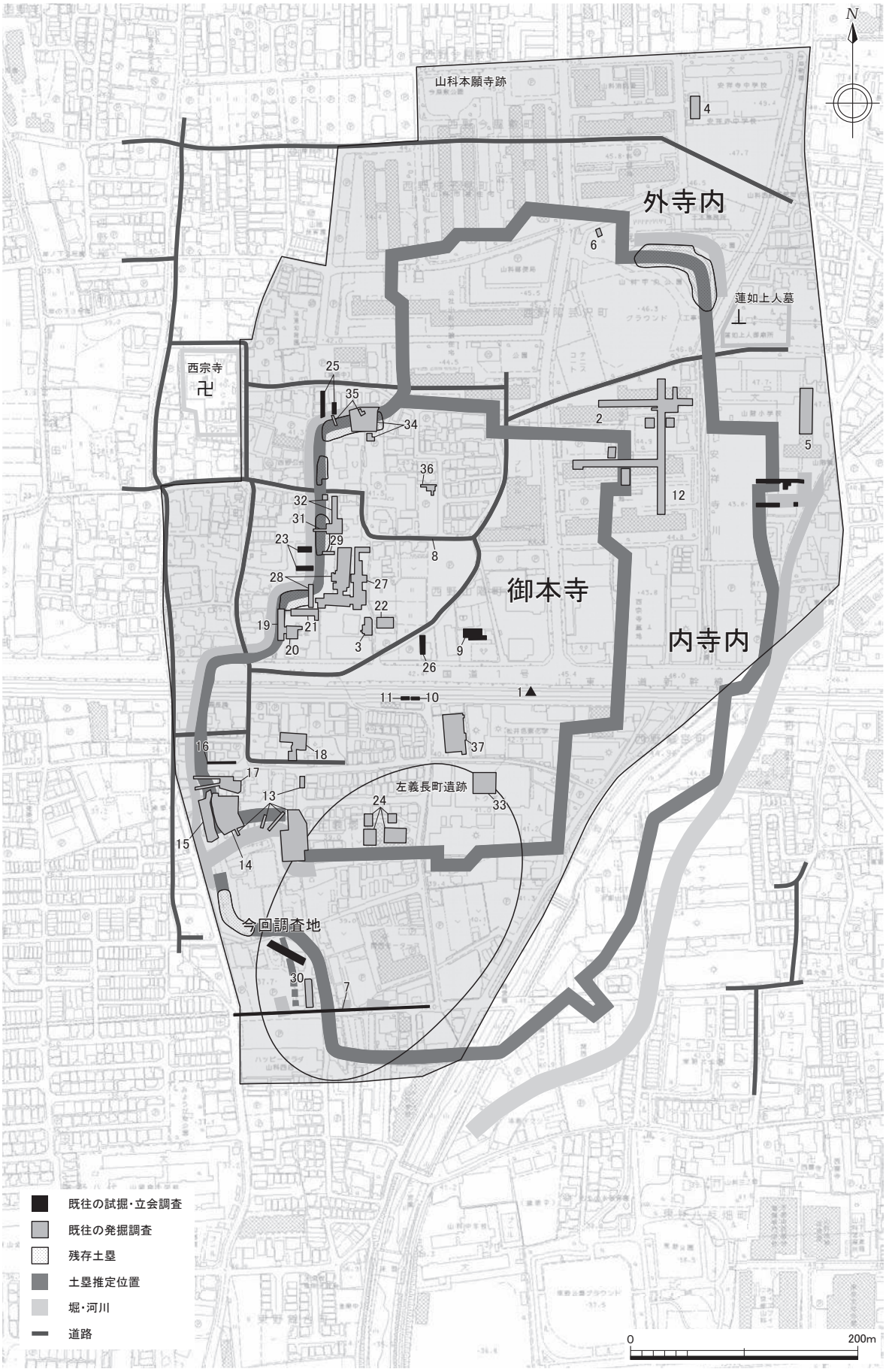


図５　既往調査位置図（１：5,000）

表１　既往調査一覧表

	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	-	立会	南北方向の石組溝・暗渠・南北方向の土塁を検出。	「27. 山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道　1965 年
2	１次調査	発掘	建物・鍛冶場・石垣・柵・南北方向の堀及び土塁を検出。	「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集　1985 年
3	２次調査	発掘	石組溝・石室・庭園の一部を検出。	「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集　1985 年
4	３次調査	発掘	旧耕作土層を検出。	「山科本願寺跡１」『昭和 51 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2008 年
5	４次調査	発掘	江戸時代以降の落込みを検出。	「山科本願寺跡２」『昭和 51 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2008 年
6	５次調査	発掘	遺構なし。	「山科本願寺跡」『昭和 53 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2011 年
7	-	立会	東西および南北方向の堀・土坑群を検出。	「山科本願寺跡」『昭和 59 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1987 年
8	-	立会	南北方向の堀及び土塁・土坑を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 62 年度』文化観光局　1988 年
9	-	立会	東西方向の石組溝を検出。	「山科本願寺跡」『昭和 61 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1989 年
10	-	立会	東西方向の石組溝を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 63 年度』文化観光局　1989 年
11	-	試掘	東西方向の石組溝を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』文化観光局　1990 年
12	-	試掘	土塁及び堀の屈曲部を検出。	「山科本願寺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1995 年
13	６次調査	発掘	東西及び南北方向の堀・東西方向の土塁・暗渠・建物・井戸を検出。	「山科本願寺跡１」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1999 年
14	７次調査	発掘	鉤型に曲がる土塁及び堀・建物・井戸・鍛冶場を検出。	「山科本願寺跡２」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1999 年
15	８次調査	発掘	南北方向の堀及び土塁・暗渠を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成 10 年度』文化市民局　2000 年
16	-	試掘	南北方向の土塁を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成 11 年度』文化市民局　2000 年
17	９次調査	発掘	建物・溝・暗渠・土塁基底部を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概要　平成 12 年度』文化市民局　2001 年
18	10 次調査	発掘	東西及び南北方向の堀・塀・柵を検出。	「山科本願寺跡（１）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 17 年度』文化市民局　2006 年
19	11 次調査	発掘	土塁基底部を検出。	「山科本願寺跡（２）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 17 年度』文化市民局　2006 年
20	12 次調査	発掘	土塁内側斜面・暗渠を検出。	『山科本願寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-3　埋文研　2005 年
21	13 次調査	発掘	土塁屈曲部・泉状遺構・炉・土取穴・暗渠を検出。	「山科本願寺跡（３）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 17 年度』文化市民局　2006 年

	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
22	14 次調査	発掘	焼成土坑・庭園遺構・柱列を検出。多量の輸入陶磁器・ガラス玉出土。	「山科本願寺跡 (4)」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 17 年度』文化市民局　2006 年
23	-	試掘	御本寺西側を限る堀の西肩口を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 17 年度』文化市民局　2006 年
24	15 次調査	発掘	御本寺西側を限る堀状の落込・土坑・井戸・溝・柱穴を検出。	『山科本願寺跡・左義長町遺跡 - 西野左義長町の調査 -』古代文化調査会　2021 年
25	-	試掘	御本寺北側を限る堀の北肩部を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 19 年度』文化市民局　2008 年
26	-	試掘	GL-0.4m で整地層を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 20 年度』文化市民局　2009 年
27	16 次調査	発掘	整地面・焼土の堆積・通路状遺構を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 23 年度』文化市民局　2012 年
28	17 次調査	発掘	整地面・石組溝・土塁を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 23 年度』文化市民局　2012 年
29	18 次調査	発掘	石組井戸・風呂関係遺構群・塀状遺構・土塁を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 24 年度』文化市民局　2013 年
30	19 次調査	発掘	中世の盛土または整地土、平安時代中期の建物・溝・土坑を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 25 年度』文化市民局　2014 年
31	20 次調査	発掘	整地土・土塁裾部を検出。	「山科本願寺跡 (1)」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 26 年度』文化市民局　2015 年
32	21 次調査	発掘	整地面・土塁・堀・溝・柱穴を検出。	「山科本願寺跡 (2)」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 26 年度』文化市民局　2015 年
33	22 次調査	発掘	酒造関連の建物・埋甕・土坑、堀を検出。	『山科本願寺跡・左義長町遺跡 - 建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』イビソク京都市内遺跡調査報告書第 14 輯　株式会社イビソク　2017 年
34	23 次調査	発掘	整地土、柵、土坑を検出。土塁地形測量及び断面観察。	「山科本願寺跡　第 23 次」『京都市内遺跡発掘調査報告　令和元年度』文化市民局　2020 年
35	24 次調査	発掘	土塁の形状と基底部の構築状況を調査。	「山科本願寺跡　第 24・25 次」『京都市内遺跡発掘調査報告　令和 2 年度』文化市民局　2021 年
36	25 次調査	発掘	土坑・井戸・整地土を検出。	「山科本願寺跡　第 24・25 次」『京都市内遺跡発掘調査報告　令和 2 年度』文化市民局　2021 年
37	26 次調査	発掘	建物・地下室・柱穴列・土取穴・堀・墓・炉状遺構を検出。	「山科本願寺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』埋文研　2022 年

埋文研→財団法人・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　文化市民局→京都市文化市民局

第Ⅲ章　調査成果

１　基本層序（図６・７）

調査では東半で古墳時代の竪穴住居、西半で中世～近世の溝、下層で平安時代末～室町時代の大溝が確認された。調査区の基本的層序は、東西で大きく異なり、東側は暗褐色砂利層が基盤層となる。それに対し西半部は、暗褐色砂利層上に褐色シルト層が厚く堆積する。古墳時代前期の竪穴住居４は暗褐色砂利層上面で確認された。西側の中世から近世に属する溝１や溝２は褐色シルト層上面で確認された。下層で確認された大溝は、褐色シルト層最下部で確認される褐色砂土上で確認された。全体の地形は調査区中央部でやや高く、東と西に緩やかに傾斜し、中央付近から西に大きく傾斜する。確認された遺構の時期は、南に傾斜する褐色シルト層の上面が中世後期～近世中期、下層の褐色砂泥層が平安時代後期から室町時代前半である。確認された遺構の上面は、後世の大きな撹乱を受けているが、西半部は住宅地以前に水田として利用され、水田耕土がわずかに残存する。東半部は、宅地以前は畑地として利用されたが、旧表土は残存せず、遺構面直上まで、現代埋め立て土が確認される。

調査区全体に、重機による撹乱坑や配管抜き取り痕と考えられる痕跡が多数確認され、水田耕作後の宅地造成時に、東半部は大きく削平を受けたものと考えられる。山科本願寺期の明確な遺構は検出していないが、西半で確認された溝１、溝２には16世紀以降の土器がわずかに含まれる。下層大溝とした遺構上面に25層の明褐色粘土が厚く堆積しており、小破片が出土し、この25層が山科本願寺期の整地土層の可能性がある。また、下層大溝中に、小破片である土師器13～16が底近くの灰色粘土層などに含まれる。

２　検出遺構（図８・９）

調査では、東半部で古墳時代の竪穴住居１棟、溝１が確認された。西半部では、中近世の溝３条、下層で平安時代末から室町時代前期の大溝１条が確認された。

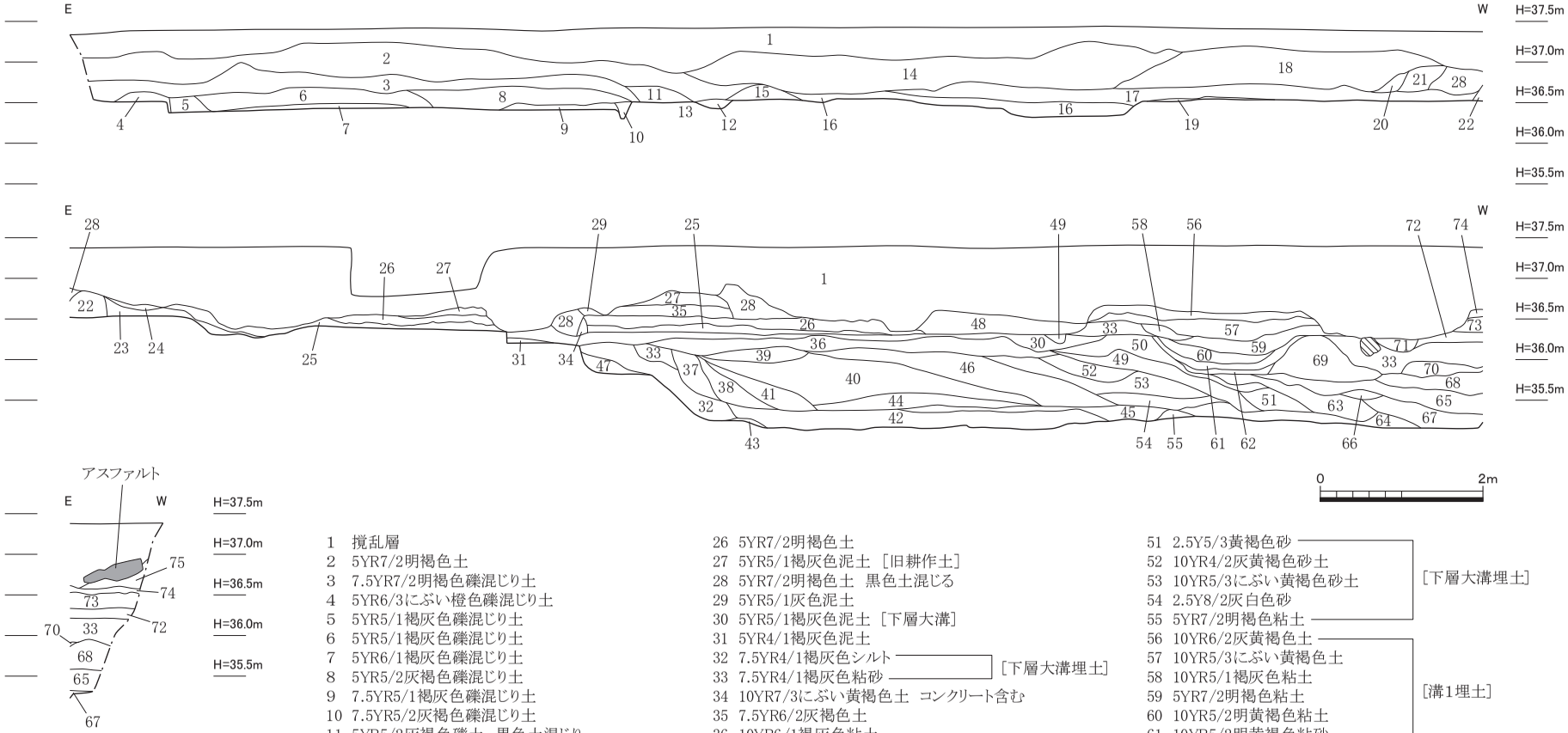
表２　遺構概要表

時代	遺構	備考
古墳時代	竪穴住居４、溝３、溝５	
平安時代	下層流路	
室町時代～江戸時代	溝１－１、溝１－２、溝２	

古墳時代

竪穴住居４（図10，図版６－１・２、７－１・２、８－１・２、９－１・２）

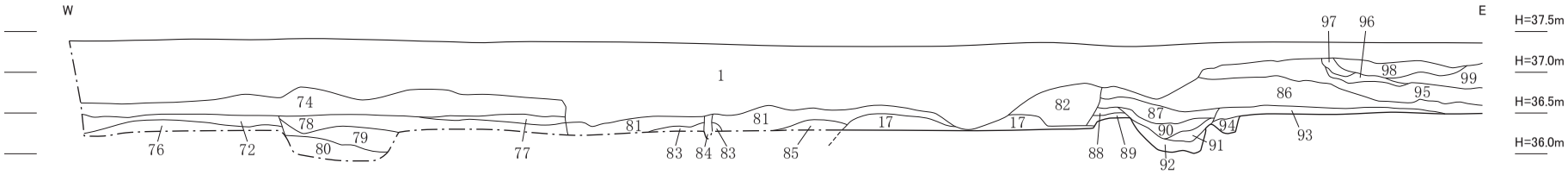
調査区東端で検出した竪穴住居である。東西5.6ｍ、南北4.3ｍ以上を測る。検出深は0.05ｍである。検出面から0.05ｍで壁溝と貼床と考えられる灰色粘土層が確認される。貼床の粘土層の残存状況は悪い。床面直上で柱穴状のPitを２基確認したが、浅く支柱穴にはならない。支柱穴は床面上

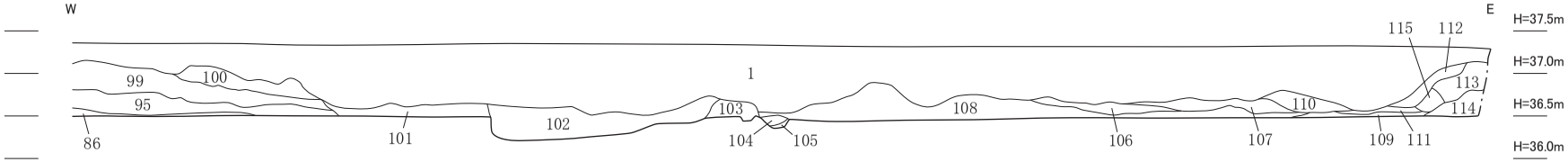


1 撹乱層
2 5YR7/2明褐色土
3 7.5YR7/2明褐色礫混じり土
4 5YR6/3にぶい橙色礫混じり土
5 5YR5/1褐灰色礫混じり土
6 5YR5/1褐灰色礫混じり土
7 5YR6/1褐灰色礫混じり土
8 5YR5/2灰褐色礫混じり土
9 7.5YR5/1褐灰色礫混じり土
10 7.5YR5/2灰褐色礫混じり土
11 5YR5/2灰褐色礫土 黒色土混じり
12 7.5YR5/2灰褐色礫混じり土
13 5YR5/2灰褐色礫土 黒色土わずかに混じる
14 5YR7/2明褐色土 コンクリート混じる［撹乱層］
15 5YR5/2灰褐色礫土黒色土ブロック混じる
16 5YR7/2明褐色土礫混じり土
17 5YR5/2灰褐色土
18 5YR7/2明褐色土
19 5YR7/2明褐色砂土
20 5YR7/2明褐色土 コンクリート混じる［撹乱層］
21 5YR7/2明褐色土
22 5YR5/2灰褐色土 弥生時代土器わずかに含む
23 5YR7/2明褐色土
24 5YR7/2明褐色土 黒色土混じる
25 5YR7/2明褐色粘質土
26 5YR7/2明褐色土
27 5YR5/1褐灰色泥土［旧耕作土］
28 5YR7/2明褐色土 黒色土混じる
29 5YR5/1灰色泥土
30 5YR5/1褐灰色泥土［下層大溝］
31 5YR4/1褐灰色泥土
32 7.5YR4/1褐灰色シルト ［下層大溝埋土］
33 7.5YR4/1褐灰色粘砂 ［下層大溝埋土］
34 10YR7/3にぶい黄褐色土 コンクリート含む
35 7.5YR6/2灰褐色土
36 10YR6/1褐灰色粘土 ［下層大溝埋土］
37 10YR4/1褐灰色粘砂 ［下層大溝埋土］
38 10YR6/1褐灰色粘砂 ［下層大溝埋土］
39 2.5Y4/1黄灰色粘砂 ［下層大溝埋土］
40 2.5Y7/1灰白色砂＋黒褐色砂互層 ［下層大溝埋土］
41 2.5Y6/1黄灰色粘砂 ［下層大溝埋土］
42 2.5Y5/1黒褐色砂利 ［下層大溝埋土］
43 2.5Y5/1黒褐色粘土 ［下層大溝埋土］
44 2.5Y5/2褐灰黄色砂 ［下層大溝埋土］
45 2.5Y5/1黒褐色粘砂 ［下層大溝埋土］
46 2.5Y6/3にぶい黄色粘砂 ［下層大溝埋土］
47 10YR4/1褐灰色砂土 ［下層大溝埋土］
48 5YR7/2明褐色土 コンクリート混じる
49 2.5Y7/2灰黄色砂 ［下層大溝埋土］
50 10YR6/1褐灰色土 ［下層大溝埋土］
51 2.5Y5/3黄褐色砂 ［下層大溝埋土］
52 10YR4/2灰黄褐色砂土 ［下層大溝埋土］
53 10YR5/3にぶい黄褐色砂土 ［下層大溝埋土］
54 2.5Y8/2灰白色砂 ［下層大溝埋土］
55 5YR7/2明褐色粘土 ［下層大溝埋土］
56 10YR6/2灰黄褐色土 ［溝1埋土］
57 10YR5/3にぶい黄褐色土 ［溝1埋土］
58 10YR5/1褐灰色粘土 ［溝1埋土］
59 5YR7/2明褐色粘土 ［溝1埋土］
60 10YR5/2明黄褐色粘土 ［溝1埋土］
61 10YR5/2明黄褐色粘砂 ［溝1埋土］
62 10YR5/3明黄褐色粘砂 ［溝1埋土］
63 10YR4/1褐灰色砂利 ［下層大溝埋土］
64 7.5YR3/1黒褐色砂利 ［下層大溝埋土］
65 10YR6/1褐灰色粘砂 ［下層大溝埋土］
66 10YR4/1褐灰色シルト ［下層大溝埋土］
67 7.5YR3/1黒褐色粘土 砂利混じり ［下層大溝埋土］
68 10YR6/1褐灰色シルト ［下層大溝埋土］
69 10YR6/1褐灰色粘砂 ［下層大溝埋土］
70 7.5YR4/3褐色粘砂 ［下層大溝埋土］
71 10YR7/2にぶい黄色橙色土 コンクリート混じる［撹乱層］
72 5YR6/2にぶい黄色橙色土［下層大溝埋土］
73 10YR6/1褐灰色土
74 10YR6/2灰黄褐色土
75 10YR3/1黒褐色土

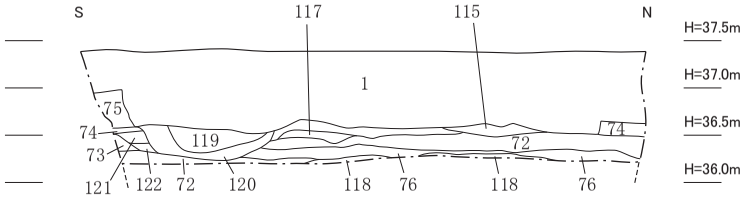
図6 調査区南壁断面図（1：80）

北壁





西壁



1　撹乱層
17　5YR5/2灰褐色土
72　5YR6/2にぶい黄色橙色土［下層大溝埋土］
73　10YR6/1褐灰色土
74　10YR6/2灰黄褐色土
75　10YR3/1黒褐色土
76　10YR6/4にぶい黄褐色砂土
77　10YR5/2灰黄褐色土
78　2.5Y7/3浅黄色土
79　2.5Y6/3にぶい黄色土 ┐［溝1埋土］
80　2.5Y7/3浅黄色粘質土 ┘
81　7.5YR5/1褐灰色土
82　7.5YR5/2灰褐色土　コンクリート混じる［撹乱層］
83　10YR5/2褐灰色土
84　10YR5/1褐灰色土　小礫混じる
85　7.5YR5/1褐灰色土
86　7.5YR6/3にぶい褐色土
87　10YR6/4にぶい黄橙色砂土
88　10YR6/4にぶい黄橙色粘質土
89　2.5Y6/3にぶい黄色粘砂
90　2.5Y6/2灰黄色砂土 ┐［溝2埋土］
91　2.5Y5/2暗灰黄色粘砂 ┘
92　2.5Y6/3にぶい黄色粗砂［溝2埋土］
93　10YR5/1褐灰色土［地形落ち込み部埋土］
94　7.5YR5/1褐灰色粘砂［溝2埋土］
95　5YR7/2明褐灰色土(2層同)
96　2.5Y5/3黄褐色土
97　2.5Y6/2黄褐色土
98　2.5Y7/3浅黄色土
99　7.5YR6/3にぶい褐色土
100　7.5YR6/2灰褐色土
101　7.5YR6/3にぶい褐色土＋黒褐色土
102　7.5YR6/4にぶい橙色土　ブロック片含む［撹乱層］
103　10YR6/2灰黄褐色土
104　10YR6/2灰黄褐色粗砂
105　10YR5/2灰黄褐色砂土
106　10YR6/3にぶい黄橙色土
107　5YR6/3にぶい橙色土
108　10YR5/2灰黄褐色土
109　10YR4/2灰黄褐色砂土　小礫を含む
110　10YR6/2灰黄褐色土　ブロック片含む［撹乱層］
111　2.5Y5/2暗灰黄色土＋白色砂を含む
112　7.5YR5/1褐灰色土＋礫を含む
113　10YR5/2灰黄褐色粗砂＋角礫含む
114　10YR6/2灰黄褐色土
115　10YR6/2灰黄褐色土＋黒褐色土混じる
117　7.5YR6/2灰褐色泥土
118　7.5YR5/3にぶい褐色泥土
119　7.5Y7/1灰白色粘土
120　5Y7/1灰白色粘土
121　5Y6/1灰色粘土
122　5Y7/2灰白色粘土

図7　調査区北壁・西壁断面図（1：80）

面および、貼床除去後も精査を行ったが確認されない。壁溝は、西壁、北壁で幅0.1ｍ、深さ0.08ｍで壁際に沿って確認された。東壁際の壁溝は、北半部まで残存し、長さ1.2ｍ、幅0.1ｍ、深さ0.08ｍである。壁溝の断面形態はＵ字状を呈する。床面直上では中央部から南西にかけてわずかに炭の点在が認められるが、炉などは確認できなかった。出土遺物は床面よりわずかに浮いて、小型器台（11）、高杯（５）が確認され、床面直上に小型平底壺（10）が確認された。住居埋土内は土器小片が確認されるが多くない。

貼床部の掘り下げでは、東南部の下部は基盤層である砂利層が存在せず、褐色シルト層が基盤となりその上面に褐色砂層が薄く堆積する。貼床除去後床面には凹凸が存在し、床面は平坦ではない。出土土器から庄内式古段階の竪穴住居と考えられる。

溝３

調査区の東半部中央で溝５に切られる溝である。溝は東西方向にやや弧を呈し確認された溝である。東側がやや高く、調査区南壁際で一段深くなり、調査区外に延びる。断面形態は緩やかなＵ字状を呈する。現在長さは５ｍ、幅1.1ｍ～1.6ｍ、東側は深さ0.2ｍ、西端で0.25ｍを測る。基盤層である砂利混じりの暗褐色土上で検出し、埋土は竪穴住居と同様の堆積土である。わずかに弥生土器の細片が出土する。

溝５（図版５－２）

調査区の東半部中央で南北方向に確認された溝である。北側・南側は調査区外に延びる。断面形態は緩やかなＵ字状を呈する。検出長は６ｍ、幅1.2ｍ～0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。南北の底面はほぼ平坦である。基盤層である砂利混じりの暗褐色土上で検出し、埋土は竪穴住居と同様の堆積土である。弥生時代後期末～庄内期と考えられる土師器が数点確認された。

中世～近世

溝２（図版５－１）

調査区の中央部で検出された溝である。溝は南北に延び、北側・南側は調査区外となる。残存長は６ｍ、幅1.2ｍ～1.5ｍ、深さ0.5ｍを測る。溝の方位は約７°東に振る。断面形態は２段の溝が並走し、西側溝が台形を呈し幅0.4ｍ、深さ0.2ｍである。東側の溝肩で確認された溝は幅0.6ｍ、深さ0.5ｍでＵ字状を呈する。溝肩部底面には直径10㎝前後の杭痕が乱雑に確認される。

溝北半部は東肩部と検出面が0.4ｍ下部で確認された。地形は東側がわずかに高く、溝２の東肩部が、地形境界となり、自然地形の微高地際に設けられた溝と考えられる。西肩部際には半円形の土手状の高まり（0.3ｍ）が北半のみ残存する。

溝埋土中から室町時代末～近世後半の土器（19・23）が出土する。

溝１－１（図版２－１、３－１・２）

調査区西端で確認された溝である。溝は南北に延び、北側と南側は調査区外となる。北端で幅1.4ｍ、深さ0.4ｍ、南端で幅1.8ｍ、深さ0.6ｍを測る。溝方位は東に25°振る。溝断面形態は、北側部は緩やかなＵ字状を呈するが平坦ではない。南側は底面でＬ字上に屈曲し溝１－２に連なる。

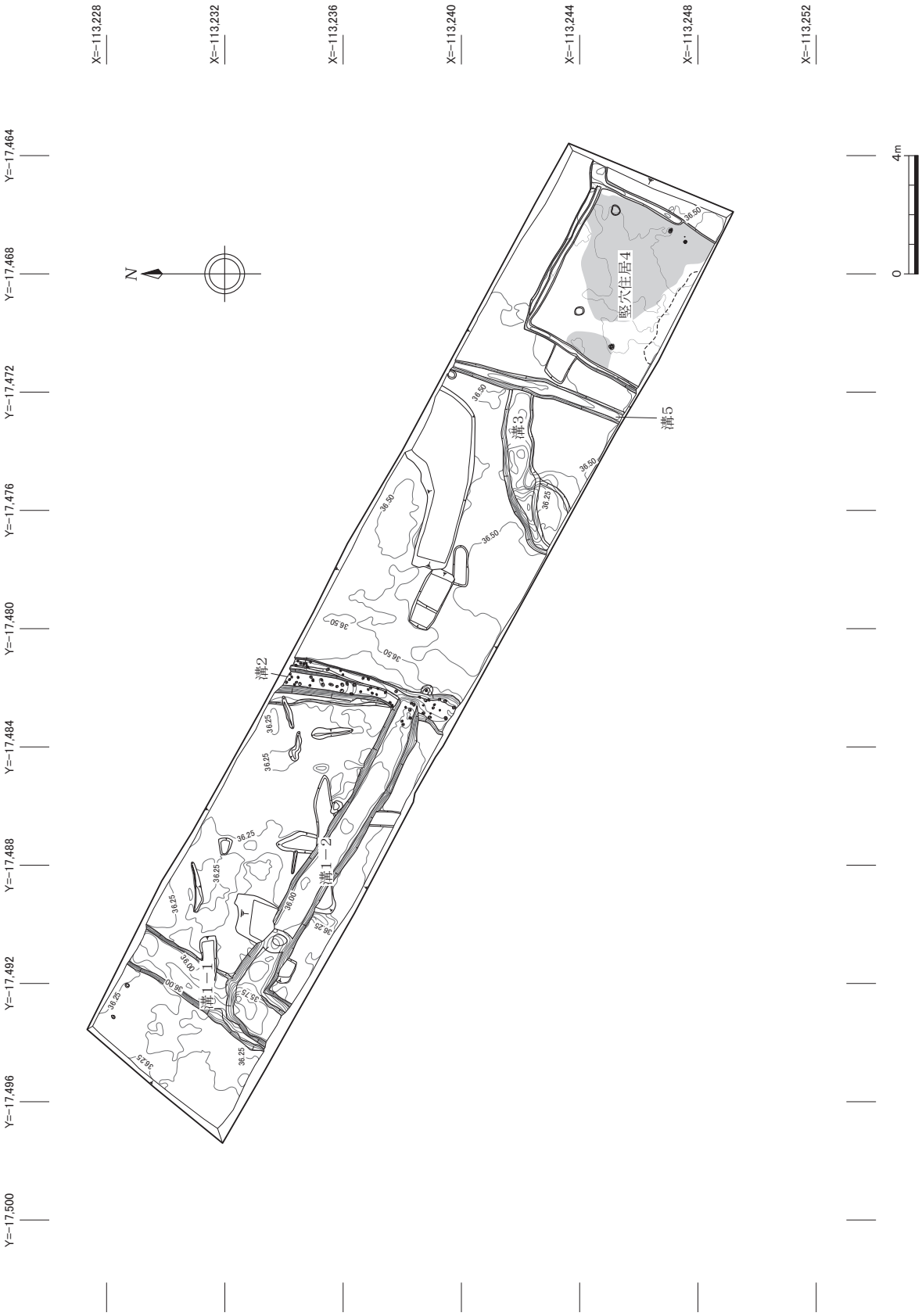


図８　上層遺構平面図（１：200）

南側溝の断面形態はやや、外に開く凹状を呈し、底面は平坦である。溝の堆積状況は、灰色粘土層を基本とし、西肩部から基盤層に近い黄褐色シルト層が存在し、埋没後一部人為的に埋められた可能性が存在する。底面に砂層があり、下層大溝の上面を一部切込み、底面にわずかな砂利層が存在する。溝内からの出土遺物は近世中頃の陶器片（24）や中世段階の瓦質土器（20）が出土するのみである。

溝１－２（図版４－１・２）

調査区南半部で溝１－１に連なり確認された溝である。埋土の状況から溝１－１と同時期と考えられる。溝は東西方向に延びる。東側は、溝２の溝肩と連なる。西側は溝１屈曲部と連なるが、溝１－１底面より0.5ｍほど底面は高い。溝の規模は、長さ11.7ｍ、幅1.3ｍ、深さ0.48ｍで断面形態はＵ字状を呈する。出土遺物は溝１－１と同様の時期であり、近世中頃に埋没した溝である。これらの溝１－１、１－２は宅地などの区画溝と想定される。

下層大溝（図版10－１・２、11－１・２）

調査区西半部の下層で確認された大溝である。上面で確認された溝２の西側3.4ｍで、溝肩が直立気味に落ち込む溝である。溝方向は南北方向に延びる。北側、南側、西側は調査区外となる。溝底面は東肩部から、緩やかに西側がわずかに高くなる。溝底面は明赤褐色泥土が底面となり平坦である。土層の堆積状況は、底近くに厚0.2ｍ前後の砂利層が堆積し、その上面に灰色粘土層が堆積し、その上面をオリーブ砂層が互層に堆積する。出土遺物は、東肩部で土師器皿（13）、灰色粘土層から土師器皿（12）が出土する。溝内で精査を行ったが出土遺物はこの土器を含めて数点程度であるが、平安時代末から室町時代の大溝また池肩であると考えられる。

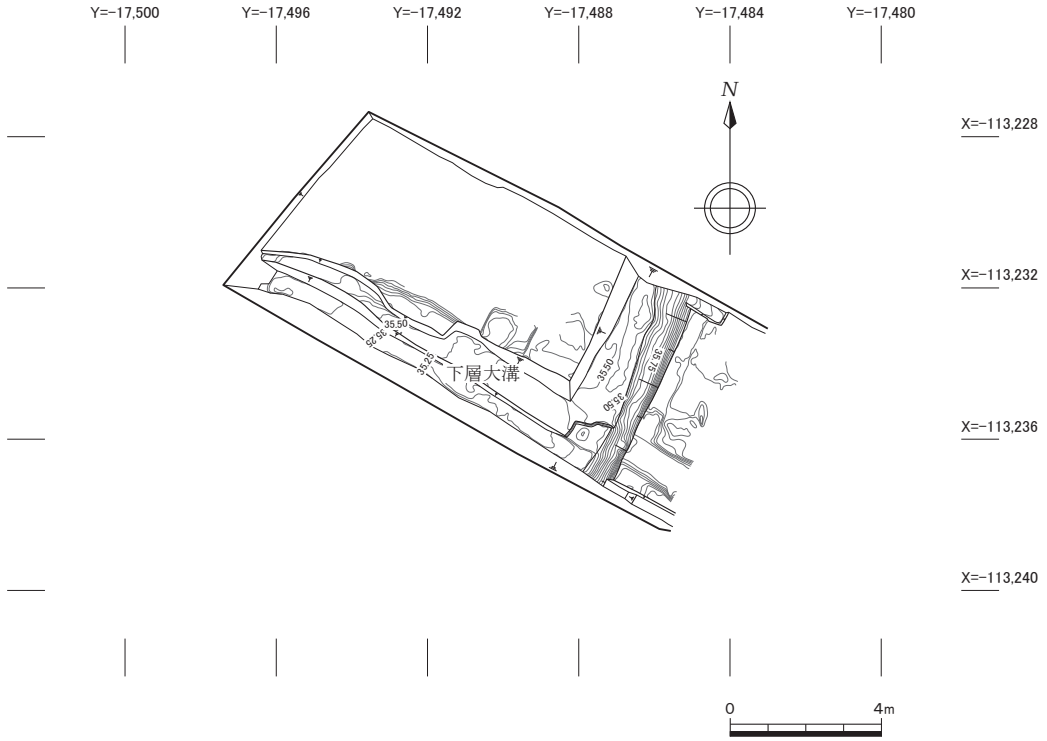
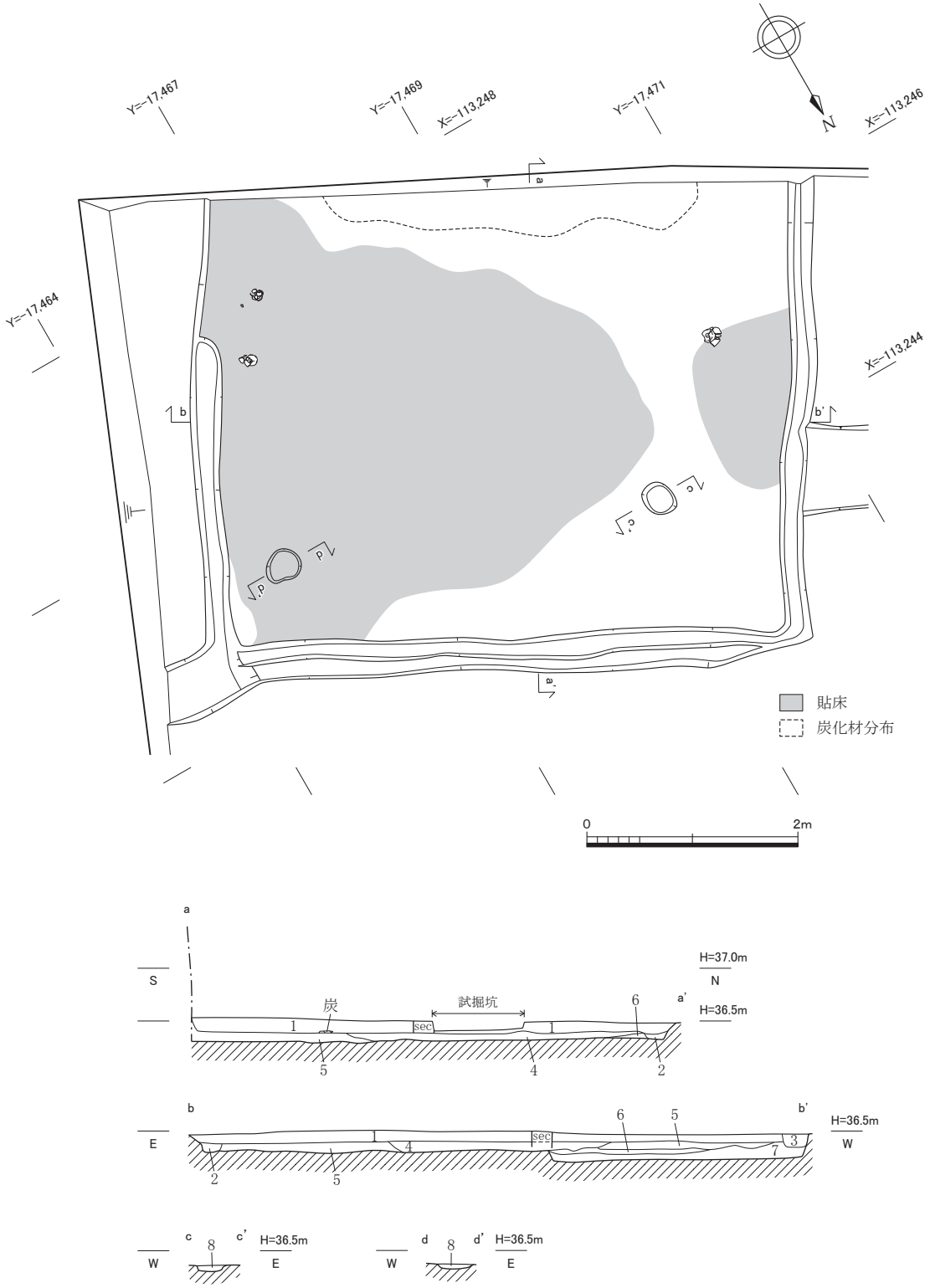


図９　下層遺構平面図（１：200）



1　2.5Y5/2暗灰黄色泥砂　φ5㎜以下の小礫多量混　下部に炭
2　2.5Y6/1黄灰色泥砂　φ5㎜の小礫混
3　5Y6/2灰オリーブ色シルト
4　5YR7/1明褐灰色シルト
5　2.5YR4/1赤灰色砂土　礫混じり
6　5YR5/3にぶい赤褐色砂土
7　7.5YR7/1明褐灰色シルト
8　5YR7/1明褐灰色シルト　黒褐色礫混じり

図10　竪穴住居４　平・断面図（１：60）

３　出土遺物

今回の調査では、土器の出土量は少なく、竪穴住居４からの土器が主体である。しかし、下層大溝については今後の課題もあることから、1/10以下の小破片についても極力図化を行った。

表３　遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Ａランク点数	Ｂランク点数	Ｃランク箱数
弥生時代～古墳時代	土師器		土師器11点		
平安時代～室町時代前半	土師器、瓦質土器、陶器、鉄製品		土師器５点、備前焼１点、灰釉陶器２点、瓦質土器１点、陶器１点、鉄製品１点		
江戸時代以降	陶磁器		陶磁器４点		
合計		２箱	26点（１箱）	０点	１箱

弥生時代～古墳時代の土器（図11、図版12－１～３・５　１～11）

弥生時代の土器とした土器はすべて竪穴住居４からの出土である。

広口壺（１）

１は、口縁部から頸部の破片である。口縁部は緩やかに広がりながら口縁端部でわずかに屈曲し、上方に立ち上がる。体部内外面の調整は磨滅が激しいために詳細は不明であるが、ナデ調整による。

甕（２・３）

２はくの字口縁の甕の破片である。体部外面には粗い平行タタキが残る。小破片であるためにタタキ単位は５条程度幅のタタキと想定される。体部内面はナデ調整が施され、ケズリなどの痕跡はなく、器壁は厚い。いわゆるＶ様式甕の系譜をひく甕と考えられる。

３は受口状口縁の甕の破片である。口縁端部はわずかに外反しながら直立気味に立ち上がり、端部でわずかに屈曲する。受口部は、面を有する。面部には刺突などの調整はみられず、全体にナデ調整である。土器の胎土は、他の土器と同様の胎土であり、山科川流域の土器と推定される。

底部（４）

４は壺底部の破片である。底径は3.8㎝と小さく、10と同様の小型壺の底部の破片である可能性がある。底部はわずかに上げ底状を呈しわずかに窪む。体部立ち上がりは緩やかに広がる。体部内外面はナデ調整と想定されるが磨滅が激しい。

高杯（５～９）

５は高杯の杯部の破片である。杯部は深く外反しながら立ち上がり、立ち上がり際は屈曲し面を有する。脚部との接合は、杯との一体成型となる。全体に磨滅が激しく調整の詳細は不明であるが、杯部内面はわずかにミガキ痕跡が残存する。

６は高杯の脚部の破片である。脚は上半で柱状を呈する。脚柱のやや上部に径８㎜の透かし穴があり、想定では３つの透かし穴である。脚部外面上半はミガキ調整が残存する。内面部は、脚部下

半でタテ方向のやや強いナデが施され、脚柱上半にしぼり痕跡が確認される。

７は高杯の脚部の破片である。脚は上半で柱状を呈する。柱部際は短く、上部で屈曲し、脚部は外方に広がる。形態などからすると小型の高杯と考えられる。体部内外面はナデ調整による。

８は脚部の裾部の破片である。裾部は緩やかに外方に広がり、端部は丸くおさまる。透かし穴は脚部中位に円形の透かし穴が残存し、推定復元では３つの透かし穴と想定される。内外面は磨滅が激しく調整は不明であるが、わずかにハケ状の擦過痕が残存する。ハケ調整後のミガキが施されると想定される。

９は脚部裾部の破片ある。裾部は緩やかに外方に広がり、端部でわずかに面を有する。内外面はわずかにナデ調整が認められるが全体に磨滅が激しい。

小型壺（10）

10は竪穴住居４の東南壁際の床面直上で確認された小型の壺である。高さは9.3㎝である。口縁は直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。口縁部外面には粘土接合痕が残る。体部は全体に張らず緩やかである。底部際は指押さえで底部から体部にかけての成形痕が明瞭に残る。底部は平坦である。内外面はナデ調整が施されるが、内面は斜め方向のナデ上げが残る。

小型器台（11）

11は高杯状を呈する器台である。器台の法量は口径8.8㎝、脚径10.2㎝で脚径が広くなる。口縁端部は直線的に広がり、端部は丸くおさまる。内外面は磨滅のため調整は不明瞭であるが、わずかに縦方向のミガキが残る。脚部中位に円形の６㎜の透かし穴が上方より穿孔され、図上復元では３つの透かしと考えられる。

竪穴住居４から出土した土器は、小破片を含め極力図化を行ったが、壺１点、甕２点、高杯５点、小型壺１点、小型器台１点と土器の種類に大きく偏る。特に煮沸具や貯蔵具の甕や壺が極端に少ない傾向にある。

土器出土年代については、器台や高杯などからみると、山城Ⅵ期の１～２段階と考えられるが、明確な庄内甕は存在せず、伝統的なＶ様式甕の系譜をひく甕が主体である。

下層大溝（図11、図版13－１　12～18）

下層大溝から出土した遺物は小破片のみであるが、口径復元が可能なものについては極力復元を行い、図化を行ったが、復元不可能のものは断面図のみとした。出土した土器はほぼこの図化した７点である。

土師器皿（12～15）

12は下層大溝の調査区西際で確認された土師器皿である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、杯部下半はわずかな指押さえ痕が残存する。体部内外面はナデによる。口径10.2㎝、器高2.1㎝である。いわゆる９Ａ段階に属すると考えられる。

13は下層大溝の最下層近くの粘土層から出土した土師器皿である。口縁部は大きく外反しながら立ち上がり、浅い皿状を呈すると考えられる。復元法量は、口径13.8㎝である。小破片のためその

所属時期は検討を有するが、１期段階に属する可能性がある。

14・15も土師器皿の口縁部の破片である。14は口縁端部がわずかに外半しながら立ち上がる皿である。杯部下半は弱い指押さえが施される。15は口縁部が直立気味に立ち上がる皿で、杯部下半は弱い指押さえが施される。ともに12と同様の時期と考えられる。

甕（16）

甕の口縁部の破片と考えられる遺物である。口縁端部がわずかに肥厚し端部が外反する。

鉄製品（17）

四角の断面形を有する細長い棒状の鉄製品である。鉄部は３㎜の正方形を呈し、残存長は11.8㎝である。鉄部上半は、1.2㎝前後の円形の持ち手が残存したと推定されるが、木質部分は腐食する。鉄部先端部近くにもわずかに木質が残存する。全体の形態は不明であるが、軸部が３㎜前後などからすると、穿孔具などの道具である可能性が想定される。

擂鉢（18）

下層大溝の上面で確認されている擂鉢である。底部は平坦であり、体部内面に６条の溝がある。色調はにぶい橙色を呈し、長石などを含む。色調などからすれば備前系の擂鉢の可能性がある。

下層大溝からは上記の土器が出土した。破片資料で全体の器形が復元できる12などからすると15世紀中ごろのまでの大溝と推定され、山科本願寺造営期まで存在した溝と考える。

溝２（図11、図版13－１・２　19、21、23）

下層大溝とした溝の東側で確認された、南北方向の溝から出土した遺物である。溝内からの遺物の出土量は少ない。

19はやや固緻の土師質の陶器の蓋である。上面は平坦な蓋となり、内面に落し蓋状に口縁部となる。平坦な蓋部の中央部に焼成前の穿孔がある。蓋部上面は全面に墨痕が残り、蓋上部で墨を磨った転用硯と考えられる。

21は灰釉陶器の椀の底部である。底径は7.6㎝で、やや外に踏ん張る高台がつく。底部内面の切り離し痕は丁寧にナデ消される。椀部は欠損するため時期は確定できないが、瀬戸美濃編年の第５型式と想定される。

23は溝上面で確認された染付椀である。染付外面には草花文が描かれる。検出面直上と水田耕作土下で確認されることから、水田耕作開始年代は江戸中期前後に開始されたものと想定される。

溝１（図11、図版12－４、13－２　20、24）

20は瓦質土器の羽釜である。残存部が1/10以下であることから断面図のみである。羽釜口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端でわずかに内に突出する。鍔部の突出は高く、内面にハケが残存する。

24は溝１の西端屈曲部上面から出土した青白磁の平向付けの皿である。体部内外面に菊花状の鎬を残し、高台は蛇の目高台である。溝屈曲部の上面から出土することから、江戸中期まで溝とし

ては機能したと想定される。

西半部検出面（図11、図版13－2　25、26）

今回の調査区では、東半部は竪穴住居４で確認された砂利層を含む堆積層と西半部の下層大溝を上面に堆積する灰白色砂土層で層位は大きく異なる。西半部においては溝２を境に、約0.4mの段差を有し、灰白色砂土層上面に暗灰色粘土層の水田耕作土が存在する。この水田耕作土は、本調査区の造成以前の1990年代以前は水田として活用された基盤層である。

しかし、山科本願寺廃絶後の山科本願寺周辺の土地は江戸初期には芝地として地元民が活用している記録があることから、江戸前期においては水田耕作地などに活用されていないと想定される。

西半部については、灰褐色粘土層の直上まで重機掘削を行い、水田面の除去後遺構検出、掘削を行った。この暗灰色粘土層から出土した遺物が25、26である。

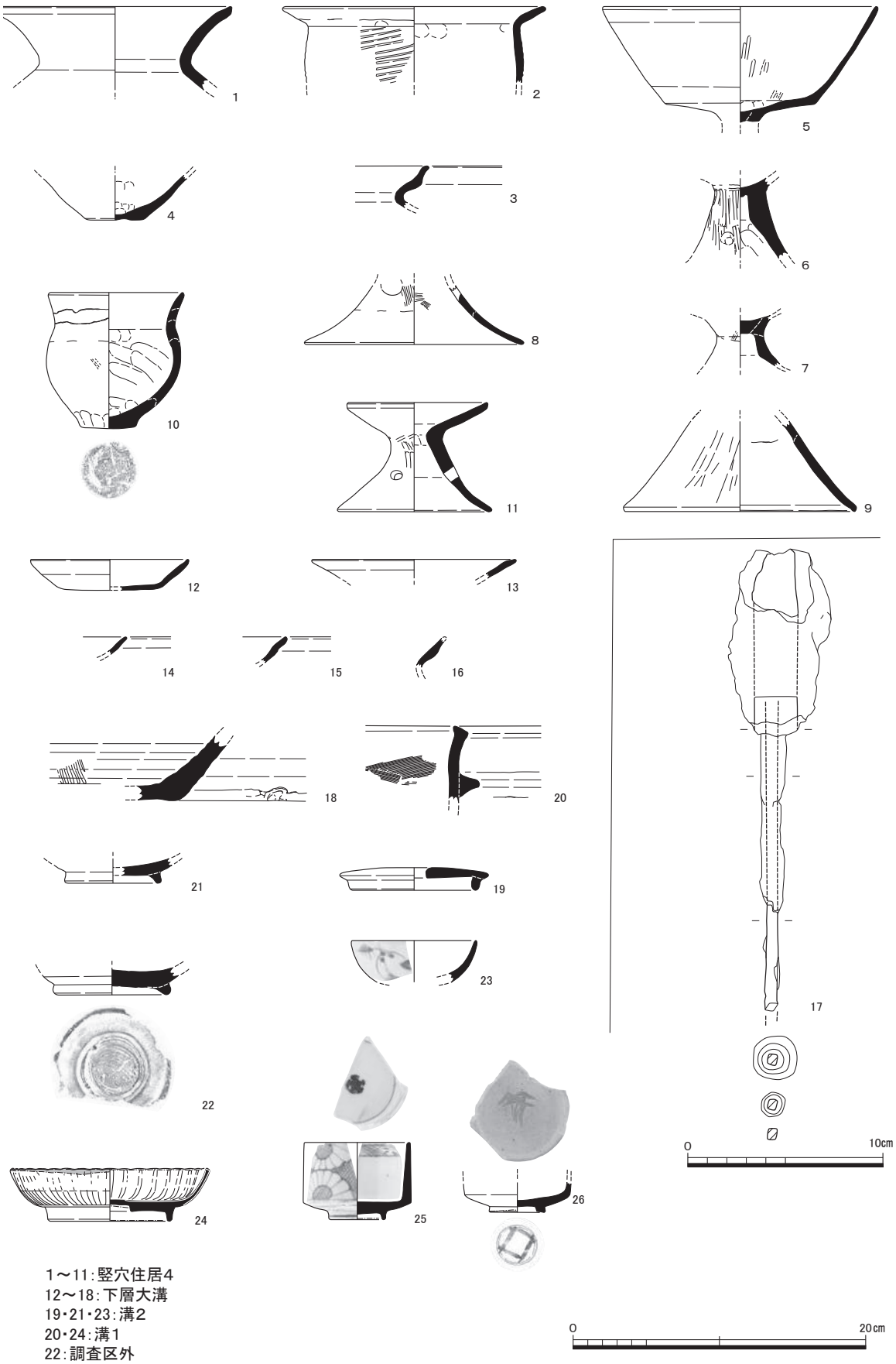
25はそば猪口であり、口径7.2㎝、高さ5.4㎝である。外面には大ぶりの菊花を描き、菊花間を細かい格子を描く。26はやや暗い灰白色を呈する椀である。内面底には、緑色の草文が描かれる。高台部内面には菱形の墨書が残存する。釉薬色調などからすると唐津焼と想定される。

この水田面からは、江戸中期頃の遺物が確認される。水田開始年代は少なくとも江戸時代中期以降に水田耕作が開始されたと想定される。

調査区外出土（図11、図版13－2　22）

宅地除去時の掘削土は、現地の表土層として一部使用されていることから、調査区外で、表採した土器の内、鎌倉時代の土器22がある。

22は、いわゆる山茶椀と称される灰釉系陶器の底部の破片である。高台は幅広の貼り付け高台により、底部切り離し痕は静止糸切りによる。高台の状況からみると第７型式段階の山茶椀と考えられる。



1～11：竪穴住居4
12～18：下層大溝
19・21・23：溝2
20・24：溝1
22：調査区外
25・26：西半部検出面

図11　出土遺物（1：3、1：4）

表４　遺物観察表

掲載No	器種	器形	地区	出土遺構・層位	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色調	焼成	胎土	調整の特徴	備考
1	弥生土器	広口壺Ａ	B-1	竪穴住居４-③区	15.8	(5.7)	-	10YR8/2 灰白色	良	5㎜以下の長石、石英、チャートを多く含む	内外面ナデ、口縁部にわずかにハケが残存する。	
2	弥生土器	甕	A-1	竪穴住居４-①	17.9	(5.8)	-	2.5Y8/2 灰白色	良	密２㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む	外面体部タタキ、内面ナデ、頸部指押さえ残る。	
3	弥生土器	受口甕	A-2	竪穴住居４-②区	-	(2.8)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	良	３㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を多く含む	内外面ナデ。	
4	弥生土器	壺底部	A-2	竪穴住居４-②区	-	(3.1)	3.8	10YR8/1 灰白色	良	３㎜以下の長石、石英、チャート、雲母を多く含む	内外面ナデ、底部内面指押さえが残る	
5	弥生土器	高杯	B-2	竪穴住居４土３	18.8	(7.8)	-	10YR8/4 橙色	良	４㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を多く含む	内外面磨滅のため調整不明、内面部にわずかなミガキ痕が残存する。	
6	弥生土器	高杯	B-2	竪穴住居４-③区	-	(5.4)	-	10YR7/2 にぶい橙色	良	密２㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む	脚部外面ミガキわずかに残る。 脚内面上部でしぼり痕残存する。	
7	弥生土器	高杯	A-1	竪穴住居４-①区	-	(3.4)	-	5YR6/6 橙色	良	密２㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む	内外面ナデ。	
8	弥生土器	高杯	A-1	竪穴住居４		(4.1)	14.8	7.5YR6/8 橙色	良	1.5㎜以下の長石、赤色粒子を含む。	外面ハケ後ナデ、内面縦方向の丁寧なナデ。	
9	弥生土器	高杯	A-2	竪穴住居４-②区	-	(6.7)	15.7	10YR ７/4 にぶい橙色	良	４㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を多く含む	内外面磨滅のため詳細不明であるが、外面にわずかにミガキ残る。	
10	弥生土器	小型平底壺	A-2	竪穴住居４土２	9.1	9.3	3.7	10YR4/1 褐灰色	良	３㎜以下の長石、石英、チャートを含む	内外面ナデ、内面横方向の強いナデあげあり、頸部内面指押さえ痕跡が残る。	
11	弥生土器	小型器台	A-2	竪穴住居４土１	4.4	7.5	10.2	10YR7/4 にぶい橙色	良	密２㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む	外面ミガキ、内面ナデ。 腕部接合部にわずかにハケが残る。	
12	土師器	皿	G-2	下層大溝	10.5	2.1	-	2.5Y8/1 灰白色	良	密 0.5㎜以下の長石、石英を含む	内外面ナデ、杯部立ち上がりにわずかに指押さえ痕残る。	
13	土師器	皿	I-2	下層大溝（粘土層）	13.8	-1.32	-	10YR3/2 灰白色	良	細密、0.5㎜以下の長石、石英、チャート、雲母を含む	内外面ナデ、杯部立ち上がりにわずかに指押さえ痕残る。	1/8 以下の小破片。
14	土師器	皿	G-2	下層大溝	-	-	-	5YR7/4 にぶい橙色	良	細密、0.5㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む	内外面ナデ、杯部立ち上がりにわずかに指押さえ痕残る。	
15	土師器	皿	G-2	下層大溝	-	-	-	5Y7/4 にぶい橙色	良	細密、0.5㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む	内外面ナデ、杯部立ち上がりにわずかに指押さえ痕残る。	1/10 以下の小破片。
16	土師器	甕	G-2	下層大溝		(2.0)		7.5YR8/4 にぶい橙色	良	細密、0.5㎜以下の長石、石英、チャート、雲母を含む	内外面ナデ。	1/10 以下の小破片で、口縁端部欠損。
17	鉄製品	錐か	G-2	下層大溝	長 11.8	厚 0.3	残存重 27.1 g	-	-	-	上半部に木質が抜けた赤さび膨れが残り、刃部断面形は四角。	
18	陶器	擂鉢	G-2	下層大溝上面	-	-	-	5Y7/4 にぶい橙色	良	細密、0.5㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む	内外面ナデ、内面溝６条。	1/10 以下の小破片。
19	陶器	蓋（転用硯）	G-2	溝２	10.2	1.55		7.5YR7/4 にぶい橙色	良	密１㎜以下の長石、石英、雲母を含む	内外面ナデ。	天部全面に墨痕跡残存する。
20	瓦質土器	羽釜	G-2	溝１	-	-	-	N3/0 暗灰色	良	密１㎜以下の長石、黒色、赤色粒子を含む	羽釜鍔部貼り付けにより、体部内面一部ハケ調整。	1/10 以下の小破片。
21	灰釉陶器	椀	E-1	溝２		(6.7)	6.4	10YR8/1 灰白色	良	密　２㎜以下の長石、石英を含む	内外面ナデ、底部丁寧なナデにより底部」切り離し痕不明。高台貼り付け。	
22	陶器	灰釉系椀		調査区外（表採）	-	(1.85)	7.6	5Y7/1 灰白色	良	密　３㎜以下の長石、石英を含む	内外面ナデ、底部静止糸切り痕が残る。高台貼り付け高台。	
23	陶磁器	染付椀	E-1	溝２	8.6	(2.9)	-	N8/0 灰白色	良	微粒子を含み密	内外面釉薬残る。	
24	白磁	皿	I-1	溝１	13.2	3.6	8.2	7.5YR4/3 褐色	良	細密	底部蛇の目高台、内外面鎬が残る。	
25	染付陶器	椀	F-1	堀上層（検出面）	7.2	5.4	3.9	N8/0 灰白色	良	細密	全面に灰白色釉薬、高台削り出し高台。	
26	陶器	椀	I-1	検出面		(2.0)	3.7	7.5Y8/1	良	細密	全面に灰白色釉薬、高台削り出し高台。	底部　ひし形文様墨書あり。

第Ⅳ章　まとめ

1　山科本願寺の調査

今回の発掘調査では、山科本願寺に伴う明確な遺構の確認はできなかった。

しかし、調査区西で確認された溝は、中世末から近世中頃の溝であり、山科本願寺廃絶後の土地利用が行われていたことが確認できた。

特に溝１－２では調査区南西端でＬ字状に屈曲することから、宅地割りなどの区画溝と推定することができる。

山科本願寺は、天文元年（1532）８月24日法華宗徒や六角氏に攻められ焼亡する。その後の山科本願寺については、天文元年（1532）11月12日に朝廷から山科言継に対し「構の溝」を一部でよいのですぐ埋めるように命令がなされるなどの記事が存在する。

しかし、明治20年（1887）の陸軍陸地測量部の仮製地図に土塁や溝の記載があり、その後大きく改変されずに残っていたことが確認されている。今回の調査では、遺構面直上で確認された水田は、江戸時代後半以降に水田として利用されたことが確認でき、明治２年（1869）５月に京都府に寺内町跡の開墾を嘆願し、明治７年に許可されるなどの諸記録と合致せず、一部先行して水田利用が開始されている可能性が確認された。

上層で確認された溝は出土遺物から山科本願寺廃絶後も機能した溝であるが、山科本願寺旧迹絵図などに土塁の外に描かれる南北溝が存在することから、廃絶以前にも機能した可能性は捨てきれない。

下層で確認された大溝は東側溝肩部で土師器皿や平安時代の遺物の小片が確認されることから、平安時代に開削された溝と考えられる。

しかし、最下層の粘土層から９Ａ期の土師器皿が確認されること、また、その溝全体を埋める灰白色砂土から、備前系の擂鉢が確認できることから、山科本願寺造営以降に埋没したと想定される。

山科本願寺の造営の記録は、年表で見るように文明10年（1478）の坊舎造営に始まり、文明15年（1483）の阿弥陀堂の瓦葺の記載の約６年間で造営がなされたと考えられている。各坊舎の材料は、御影堂用用材として吉野から50本の木材が運ばれたとされ、大澤研一氏[1]は応仁２年（1462）に

表５　山科本願寺略年表

和暦	西暦	事項
文明 10 年	1478	1.29 山城山科に至り坊舎造営開始
文明 11 年	1479	山科に庭園造り、網所を新立し、堺の坊舎を移築
		御影堂用用材 50 本吉野から運ぶ
文明 12 年	1480	1 山科に三条敷の小御堂造立
		2.3 御影堂造営開始
		3.28 御影堂上棟
		8.28 御影堂仮仏殿に親鸞画像を安置
		11.18 親鸞影像を山科に移す
文明 13 年	1481	1.22 山科に寝殿大門立柱
		2.4 山科に阿弥陀堂造営
		4.28 阿弥陀堂上棟
		6.8 阿弥陀堂仮仏壇に本尊安置
文明 14 年	1482	1.17 御影堂大門造立
		1.28 御影堂大門立柱
		6.15 阿弥陀堂に本尊安置
文明 15 年	1583	8.22 阿弥陀堂に瓦葺

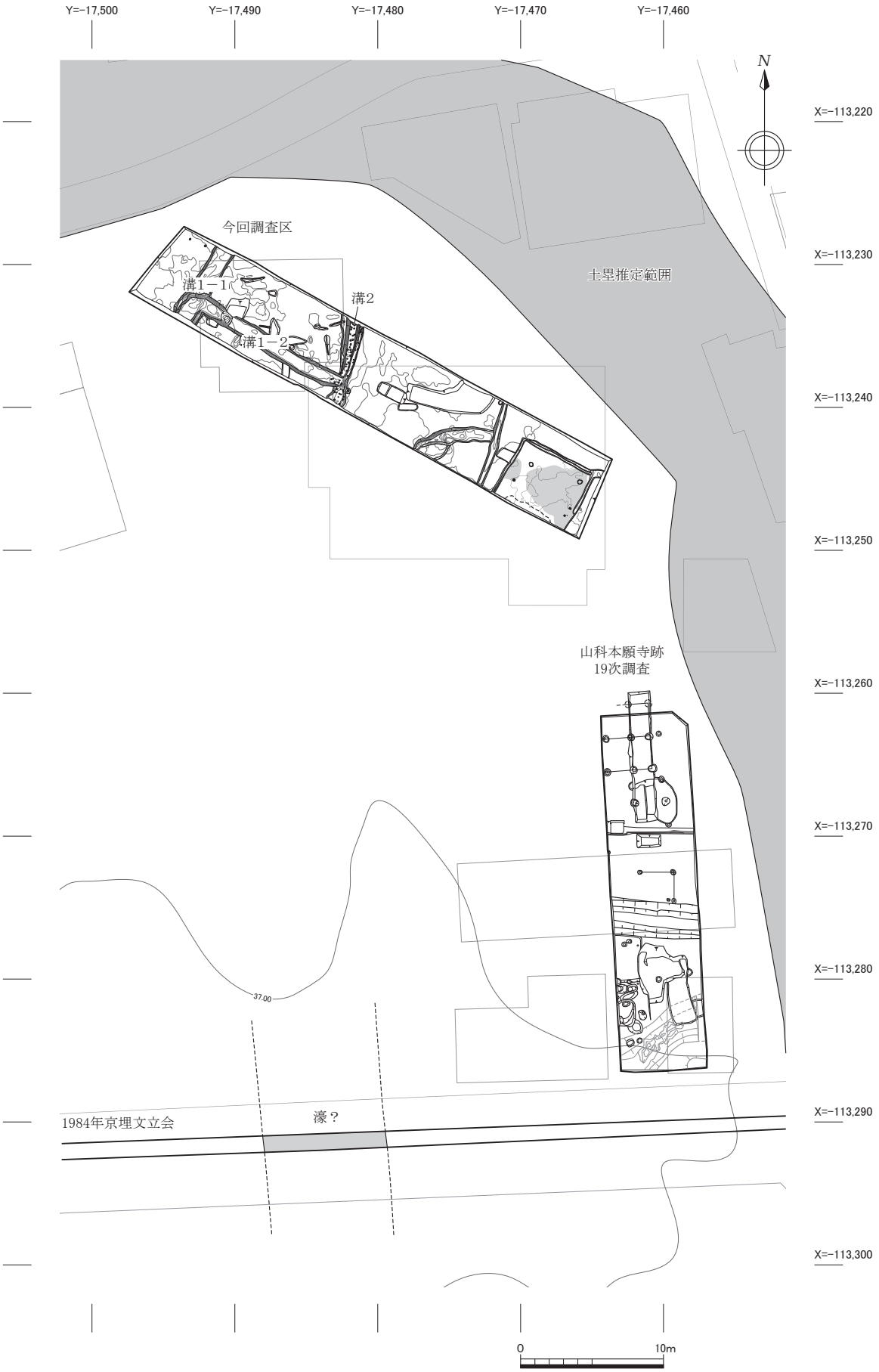


図12　調査区周辺遺構配置図（1：400）

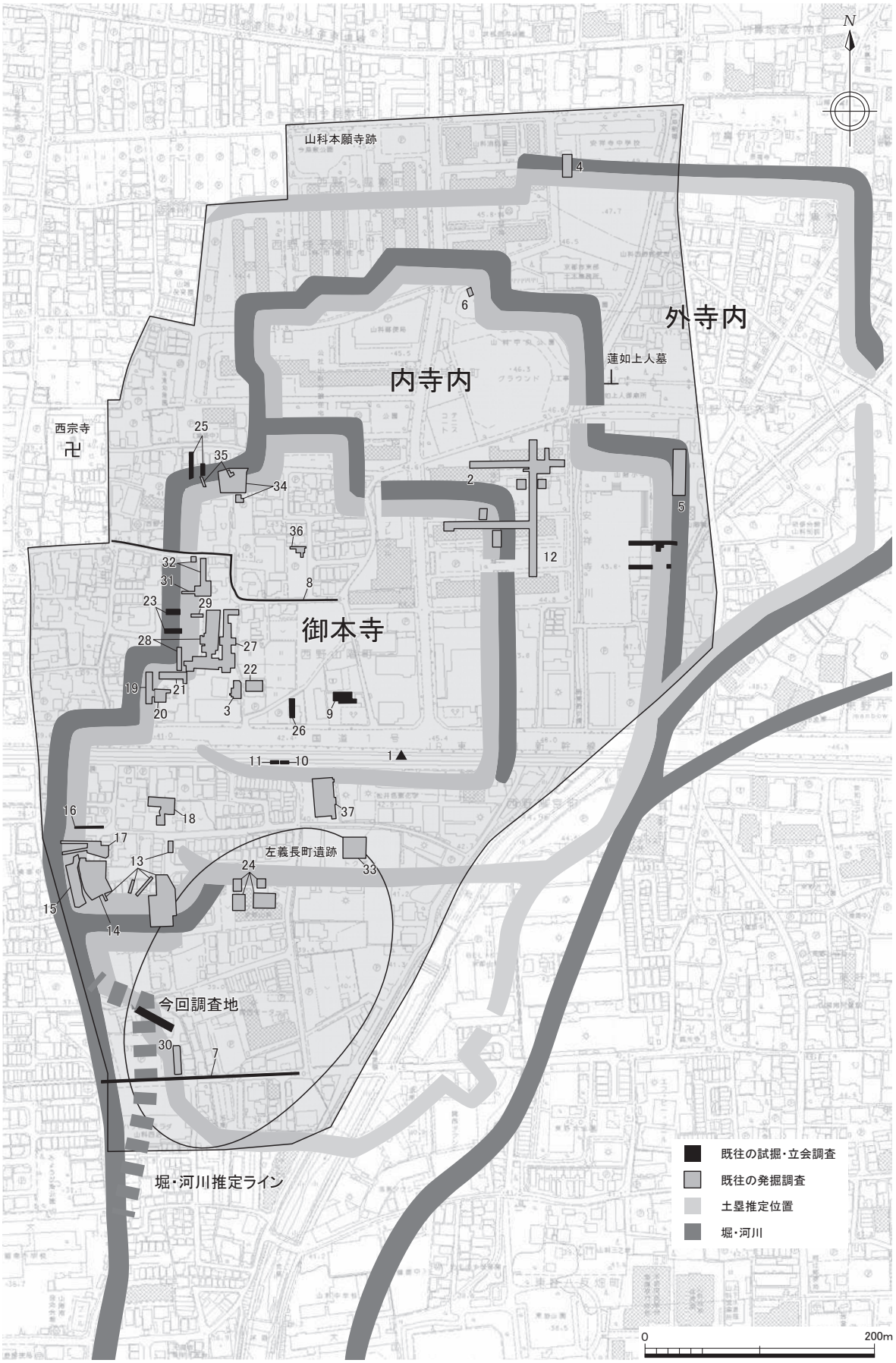


図13　山科本願寺跡　光照寺本寺内復元図（1：5,000）

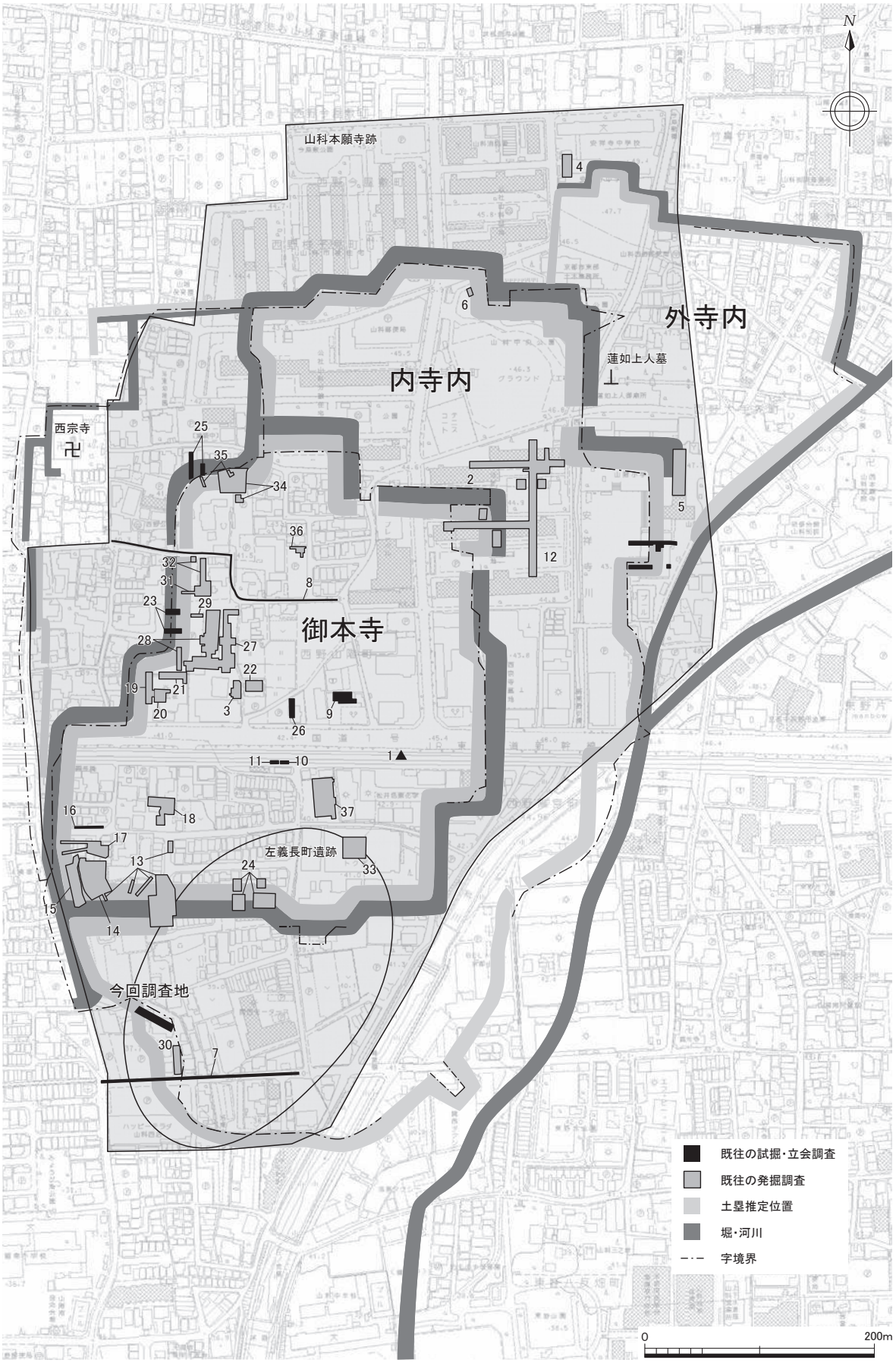


図14　山科本願寺跡　洛東高校・西宗寺本寺内復元図（1：5,000）

蓮如が吉野に足を運ぶ記事が、本願寺造営の用材確保のための行動ではないかとの指摘する。こうした用材の搬入には河川利用の検討が必要とされた。

山科本願寺の復元案には、岡田保良氏・浜崎一志氏[(2)]が、「光照寺本」・「洛東高校・西宗寺本」それぞれから復元した２案が存在する。「光照寺本」には西側土塁に並列した堀の記載が存在するが、「洛東高校本・西宗寺本」には南西部の堀の記載がない。山科本願寺造営初期には、平安時代から存在した大溝（河川）を利用し、資材の運搬が行われた後に、その大溝を埋め、現西野道の前身の街道を整備した可能性が想定できる。すでに浜崎氏[(3)]が指摘するように「光照寺本」[(4)]の山科本願寺の絵図は、他の絵図に比べて古い姿を示すものである可能性があり、本調査で確認された下層大溝の状況と合致するものである。

この平安期に遡る溝を積極的に捉えるならば、四ノ宮川から分岐する南北の大溝が山科本願寺の前身「おおほり」の可能性を想定することができ、山科本願寺以前にも何らかの遺跡が存在する可能性がある。こうした結果は近接する、19次調査で確認された平安時代の鍛冶関係遺跡が存在するように、平安時代には、東野・西野の地に広く遺跡が存在すると考えられる。

室町時代の後期に、京周辺に新たに山科本願寺、嵯峨野、北野といった都市空間が誕生し栄えるといわれる。これは、応仁の乱以降荒廃した、中世京都の周辺に、宗教を中心とした新たな都市空間が誕生した時期と考えられる。山科本願寺で見られた、平城的な空間に町家を含めて惣構を構えるなど、それ以前の都市のあり方とは隔絶した姿であるといえる。これは中世後期の先進地的な様相がこの山科地域に存在すると考えられる。

註

（１）大澤研一・仁木宏編『寺内町の研究２　寺内町の系譜』1998法蔵館

（２）岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民俗博物館第８集　共同研究「中世の地方政治都市」』1987　国立歴史民俗博物館

（３）岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民俗博物館第８集　共同研究「中世の地方政治都市」』1987　国立歴史民俗博物館

（４）各山科本願寺絵図については、大谷大学博物館2016年度特別展「戦国乱世と山科本願寺」図録を参考とした。

２　山科盆地の弥生時代～古墳時代前期の所相

山科盆地には、古くから弥生時代の遺跡として知られる中臣遺跡が存在する。

中臣遺跡の発掘調査は現在まで93次の調査が実施され、弥生時代前期～後期に至る遺構・遺物が確認されている（表６）。

しかし、93次までの調査で確認された弥生時代から古墳時代初頭の竪穴住居51棟中、弥生時代中期（Ⅱ期）に遡る竪穴住居は79次調査の31号住居址のみである。

確認された地点は、中臣遺跡の南東部にあたり、段丘と低地の境に位置する調査区である。確認される竪穴住居は79次調査の竪穴住居を除くと、弥生時代後期後葉から古墳時代前期（布留式段

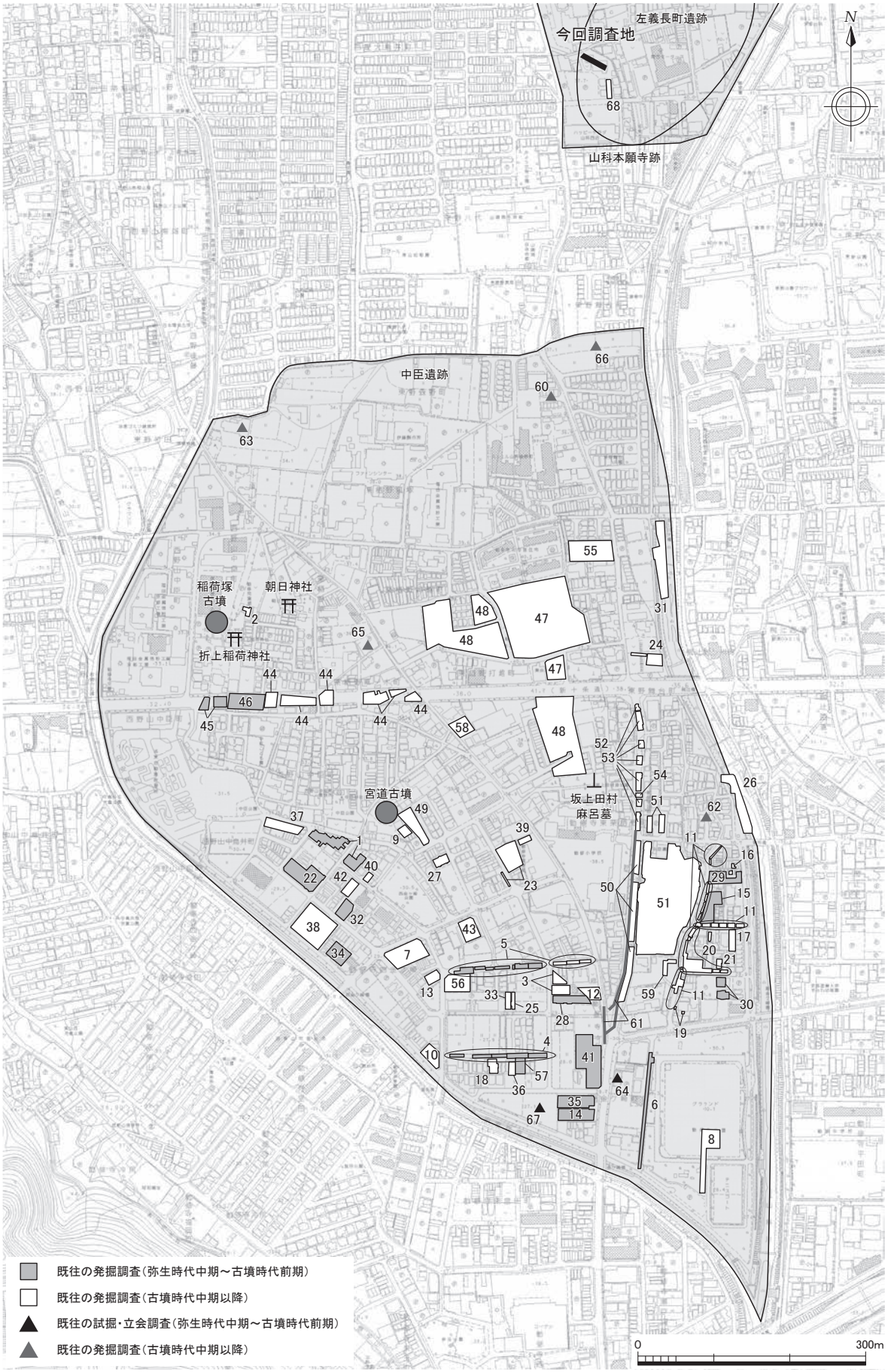


図15　中臣遺跡　既往調査位置図（1：7,500）

階）のものが主体であり、中臣遺跡の集落は弥生時代後期後葉から布留式段階の集落が主体である。今までの調査では、複数の竪穴住居が重なり合いながら確認される調査がある半面、今回の調査のように単独で確認される地点に分かれる。複数の竪穴住居が確認される地点は中臣遺跡の南半部の東西に弧状に集中する（図15）。

今回の調査地に含まれる、左義長町遺跡は中臣遺跡から少し離れた地点に位置するが、中臣遺跡が、山科川流域に発達した段丘や自然堤防の際にあたる弧状の地形に住居址が立地することからすると、中臣遺跡と連なる地形に弥生時代後期以降の集落が立地する可能性は捨てきれない。

また、後期以降の竪穴住居は、伝統的な円形の竪穴住居から庄内期以降、方形を主体とする竪穴住居に転換する。同時にこの段階に多角形の竪穴住居が少数存在する。（35次３号住、56次３号住、70－４次調査２号住）

こうした多角形住居の系譜は守山市伊勢遺跡で指摘されるように、弥生時代後期から古墳時代初頭の五角形竪穴住居が確認され、この時期に北陸西部の影響が近江に流入し、大きく住居形態が変化したとされる。

今回の調査では、純粋に近江系と考えられる受口口縁の甕は確認されず、Ｖ様式系統のタタキ甕が主体である。しかし、中臣遺跡の調査では近江系の受口甕の存在など山科盆地の弥生時代の遺跡は、近江と深い関係を有したことは想定できる。こうした近江系の流入は山科盆地にとどまらず、

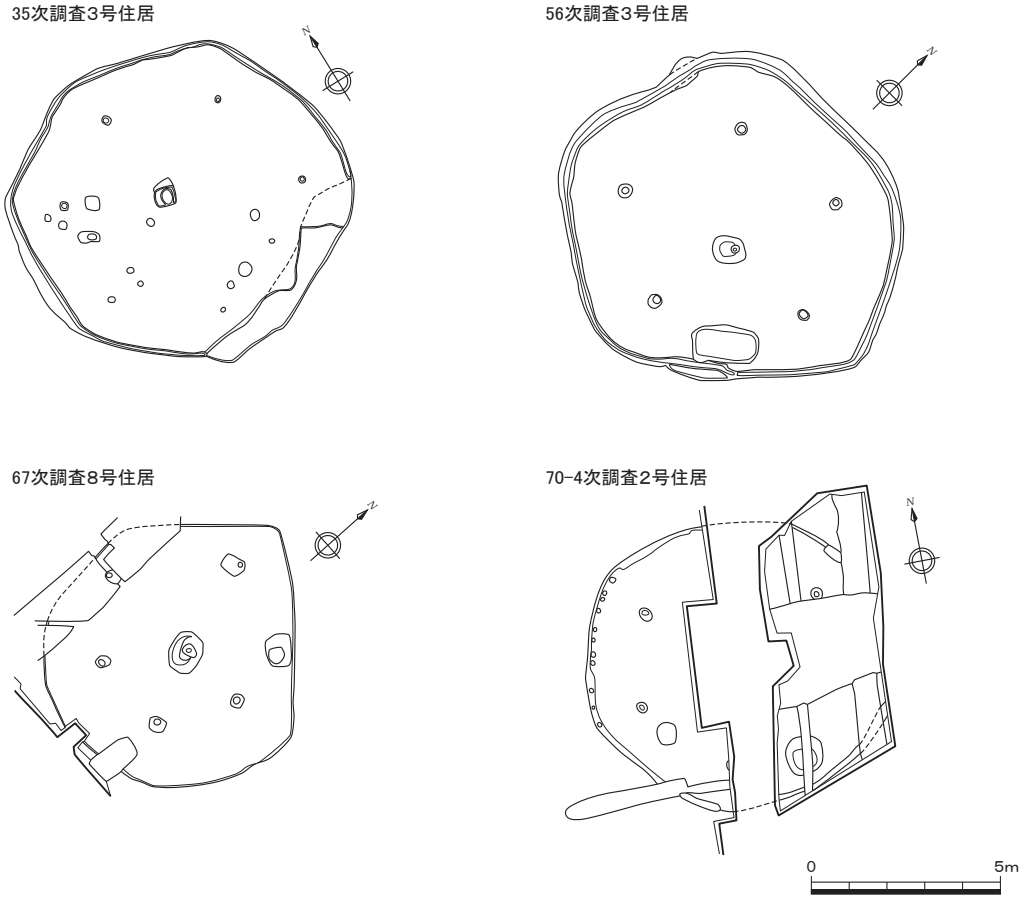


図16　中臣遺跡　多角形竪穴住居平面図（１：200）

山科川を媒介とし巨椋池周辺の遺跡に連なり、木津川流域へと広がるものと想定される。

山城地域は、淀川水系と木津川水系の二つの水系毎に弥生時代の遺跡が展開し、木津川水系の奥津城としての山科盆地の弥生遺跡の存在が重要な地域となると想定される。

表６　中臣遺跡　既往調査一覧表

	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	７次調査	発掘	弥生時代末期の竪穴建物、古墳時代中期の竪穴建物、古墳時代後期の竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・粘土溜状遺構を検出。	「11 中臣遺跡７次調査」『昭和 51 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2008 年
2	９次調査	発掘	平安時代から鎌倉時代の土坑・柱穴・柵・溝、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物・土坑・溝を検出。	「39 中臣遺跡９次調査」『昭和 52 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
3	10 次（A・B）調査	発掘	平安時代の掘立柱建物・溝・井戸・土坑を検出。井戸より墨書土器・木簡出土。	「(1)10 次調査 A・B 区」『昭和 52 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
4	10 次（D-18）調査	発掘	弥生時代後期の竪穴建物、飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物・掘立柱建物・落込みを検出。	「(5)10 次調査 D-18 区」『昭和 52 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
5	10 次（E-16）調査	発掘	弥生時代後期の竪穴建物、弥生時代から平安時代の掘立柱建物・土坑・溝を検出。	「(8)10 次調査 E-16 区」『昭和 52 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
6	10 次（E-22）調査	発掘	弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代の土坑を検出。	「(9)10 次調査 E-22 区」『昭和 52 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
7	12 次調査	発掘	弥生時代から中世の遺物包含層を検出。	「58　中臣遺跡 12 次調査」『昭和 53 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
8	13 次調査	発掘	時期不明の南北溝・土坑を検出。	「59　中臣遺跡 13 次調査」『昭和 53 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
9	14 次調査	発掘	飛鳥時代から古墳時代の竪穴建物・溝・柱穴を検出。	「60　中臣遺跡 14 次調査」『昭和 53 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
10	15 次調査	発掘	弥生時代後期の方形周溝墓を検出。	「61　中臣遺跡 15 次調査」『昭和 53 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
11	16 次調査	発掘	飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物･掘立柱建物を検出。	「62　中臣遺跡 16 次調査」『昭和 53 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
12	17 次調査	発掘	古墳時代終末期の遺物包含層を検出。	「63　中臣遺跡 17 次調査」『昭和 53 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
13	18 次調査	発掘	縄文時代後期の土器片、古墳時代後期の須恵器片が出土。	「64　中臣遺跡 18 次調査」『昭和 53 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
14	20 次調査	発掘	弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物･土坑･溝･柱穴を検出。	「52　中臣遺跡 20 次調査」『昭和 54 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2012 年
15	21 次調査	発掘	弥生時代後期の竪穴建物､古墳時代終末期の竪穴建物･掘立柱建物、平安時代前期の掘立柱建物、平安時代中期の溝を検出。	「53　中臣遺跡 21 次調査」『昭和 54 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2012 年
16	25 次調査	発掘	時期不明の土坑・ピット、縄文時代から弥生時代の遺物包含層を検出。	「57　中臣遺跡 25 次調査」『昭和 54 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2012 年
17	26 次調査	発掘	時期不明の落込み・ピット、縄文時代の遺物包含層を検出。	「58　中臣遺跡 26 次調査」『昭和 54 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2012 年
18	28 次調査	発掘	古墳時代の竪穴建物・柱穴・土坑・溝を検出。	「60　中臣遺跡 28 次調査」『昭和 54 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2012 年
19	31 次調査	発掘	弥生時代の溝・土坑を検出。	「63　中臣遺跡 31 次調査」『昭和 54 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2012 年
20	32 次調査	発掘	奈良時代の溝、時期不明の柱穴を検出。	「64　中臣遺跡 32 次調査」『昭和 54 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2012 年
21	34 次調査	発掘	弥生時代後期の土坑、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴建物・掘立柱建物、奈良時代の掘立柱建物を検出。	「52　中臣遺跡 34 次調査」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年

	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
22	35 次調査	発掘	弥生時代後期の竪穴建物・土坑、古墳時代後期の竪穴建物・掘立柱建物・柵列を検出。	「53　中臣遺跡 35 次調査」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
23	38 次調査	発掘	弥生時代後期の方形周溝墓を検出。	「56　中臣遺跡 38 次調査」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
24	40 次調査	発掘	縄文時代晩期の土坑・土器棺墓、弥生時代中期の溝・土坑、古墳時代後期の竪穴建物、古墳時代から平安時代の掘立柱建物を検出。	「58　中臣遺跡 40 次調査」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
25	41 次調査	発掘	古墳時代前期の竪穴建物、古墳時代後期の土坑・溝、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物を検出。	「59　中臣遺跡 41 次調査」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
26	42 次調査	発掘	縄文時代後期から晩期の土坑・湿地状遺構、弥生時代後期の土坑、古墳時代後期の土坑・溝・湿地状遺構・柵列を検出。	「60　中臣遺跡 42 次調査」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
27	43 次調査	発掘	古墳時代後期の竪穴住居を検出。	「61　中臣遺跡 43 次調査」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2011 年
28	46 次調査	発掘	弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物・土坑、古墳時代後期の竪穴建物・掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物・溝・土坑、古墳時代後期から平安時代のピットを検出。	「45　第 46 次調査」『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1983 年
29	48 次調査	発掘	古墳時代前期の竪穴建物・溝、平安時代の溝を検出。	「46　第 48 次調査」『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1983 年
30	49 次調査	発掘	縄文時代後期の埋甕、古墳時代前期の竪穴建物、古墳時代後期の溝を検出。	「47　第 49 次調査」『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1983 年
31	51 次調査	発掘	縄文時代晩期の埋甕、弥生時代前期から中期の流路、古墳時代後期の溝を検出。	「37　第 51 次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1984 年
32	52 次調査	発掘	縄文時代晩期の埋甕、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物、古墳時代後期の竪穴建物を検出。	「38　第 52 次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1984 年
33	53 次調査	発掘	古墳時代の竪穴建物、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物を検出。	「39　第 53 次調査」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1984 年
34	55 次調査	発掘	古墳時代前期の竪穴建物、古墳時代後期の溝、江戸時代後期の旧安祥寺川旧河道を検出。	「33　第 55 次調査」『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1985 年
35	56 次調査	発掘	弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物・土坑、古墳時代後期の溝を検出。	「34　第 56 次調査」『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1985 年
36	57 次調査	発掘	弥生時代後期から古墳時代前期の土坑、古墳時代後期の竪穴建物、飛鳥時代の掘立柱建物を検出。	「35　第 57 次調査」『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1985 年
37	59 次調査	発掘	古墳時代後期の古墳、平安時代前期の竪穴建物・掘立柱建物を検出。	「27　中臣遺跡第 59 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1987 年
38	60 次調査	発掘	弥生時代後期の土坑、古墳時代後期の竪穴建物･土坑･溝、時期不明の掘立柱建物・ピット、江戸時代の旧安祥寺川旧河道を検出。	「28　中臣遺跡第 60 次調査」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1987 年
39	61 次調査	発掘	弥生時代後期の方形周溝墓を検出。	「29　中臣遺跡第 61 次調査」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1988 年
40	63 次調査	発掘	古墳時代後期の竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・柱穴を検出。	「30　中臣遺跡第 63 次調査」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1988 年
41	67 次調査	発掘	古墳時代前期の竪穴建物・土坑、古墳時代後期の竪穴建物・掘立柱建物・溝を検出。	「22　中臣遺跡第 67 次調査」『昭和 61 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1989 年
42	68 次調査	発掘	弥生時代後期の土坑、古墳時代後期の竪穴建物・溝を検出。	「34　中臣遺跡第 68 次調査」『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1991 年

	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
43	69 次調査	発掘	奈良時代の土坑、平安時代の掘立柱建物・土坑、室町時代以降の溝を検出。	「35　中臣遺跡第 69 次調査」『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1991 年
44	70-1 次調査	発掘	Ⅳ区にて平安時代中期の掘立柱建物、Ⅴ区にて鎌倉時代から室町時代の溝・土坑・柱穴を検出。	「36　中臣遺跡第 70-1 次調査」『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1993 年
45	70-2 次調査	発掘	縄文時代中期の土坑、弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代後期の古墳、平安時代前期の掘立柱建物・土坑を検出。	「34　中臣遺跡第 70-2 次調査」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1994 年
46	70-4 次調査	発掘	縄文時代中期から後期の土坑、弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代後期の古墳・土坑、平安時代前期の掘立柱建物・土坑、平安時代中期の土坑、平安時代末期から鎌倉時代前半の埋納遺構を検出。	「14　中臣遺跡第 70-4 次調査」『平成３年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1995 年
47	73 次調査	発掘	縄文時代晩期の土器棺墓・掘立柱建物・土坑・立柱、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴建物・掘立柱建物・柱穴・土坑、平安時代後期の土器埋納遺構、鎌倉時代の掘立柱建物。室町時代の火葬墓と濠を検出。	「14　中臣遺跡 73 次調査」『平成６年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1996 年
48	74 次調査	発掘	旧石器時代の石器集中部･礫群、縄文時代晩期の土坑、飛鳥時代の竪穴建物・掘立柱建物・土坑墓・柱穴・溝・土坑、平安時代末期から鎌倉時代の木棺墓、室町時代の土坑、安土・桃山時代の溝を検出。	「10　中臣遺跡 74 次調査」『平成７年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1997 年
49	76 次調査	発掘	弥生時代中期の方形周溝墓・土坑・ピットを検出。	「20　中臣遺跡 76 次調査」『平成９年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　1999 年
50	77 次調査	発掘	古墳時代後期の古墳・土坑墓、飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物・掘立柱建物、室町時代から江戸時代初期の旧西野道路面及び東側溝を検出。	「15　中臣遺跡 77 次調査」『平成 10 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2000 年
51	79 次調査	発掘	縄文時代晩期の土器棺墓、弥生時代中期の竪穴建物、弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代後期の古墳・木棺墓、古墳時代終末期から飛鳥時代の竪穴建物・掘立柱建物・木棺墓、奈良時代から平安時代の掘立柱建物・木棺墓を検出。	「12　中臣遺跡 79 次調査」『平成 11 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京埋文　2002 年
52	80 次調査	発掘	弥生時代の方形周溝、古墳時代後期の竪穴住居、古墳周溝が確認される。平安時代掘立柱建物３棟検出。	「中臣遺跡 80・81 次調査」『平成 12 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所　2003 年
53	81 次調査	発掘	平安時代の柱穴を検出。	「中臣遺跡 80・81 次調査」『平成 12 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所　2003 年
54	82 次調査	発掘	平安時代中期以前の土坑、平安時代中期から後期の掘立柱建物・溝を検出。	『中臣遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-1　埋文研　2005 年
55	83 次調査	発掘	古墳時代の竪穴建物・掘立柱建物・柱列、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物・溝・柱列を検出。	『中臣遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-8　埋文研　2006 年
56	84 次調査	発掘	旧安祥寺川に伴う落込みを検出。	「Ⅶ　中臣遺跡 84 次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 19 年度』文化市民局　2008 年
57	85 次調査	発掘	弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物、古墳時代後期の土坑、飛鳥時代の掘立柱建物･土器棺墓を検出。	「Ⅳ　中臣遺跡 85 次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 21 年度』文化市民局　2010 年
58	-	発掘	近世末期から近代の土坑・ピット・井戸・溝・落込みを検出。	「Ⅵ　中臣遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 30 年度』文化市民局　2019 年
59	93 次調査	発掘	古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物、江戸時代の掘立柱建物・溝・落込みを検出。	『京都市山科区　中臣遺跡　第 93 次発掘調査報告書』京都平安文化財発掘調査報告 第９集　有限会社京都平安文化財　2020 年
60	-	試掘	平安時代の土坑・柱穴を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報　平成９年度』文化市民局　1998 年
61	-	立会	古墳時代の竪穴建物の竈を検出。	「3　中臣遺跡 (OORT136)」『京都市内遺跡立会調査概報　平成 12 年度』文化市民局　2001 年

	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
62	-	試掘	古墳時代の竪穴建物・柱穴・土坑・溝を検出。	「Ⅴ-3　中臣遺跡　№82」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』文化市民局　2006年
63	-	試掘	弥生時代から古墳時代の溝、平安時代中期の柱列を検出。	「Ⅴ-3　中臣遺跡1　№70」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』文化市民局　2006年
64	-	試掘	弥生時代後期の竪穴建物・溝・土坑を検出。	「Ⅴ-4　中臣遺跡2　№73」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』文化市民局　2006年
65	-	試掘	平安時代の溝、近世の土坑・柱穴・ピットを検出。	「Ⅳ-4　中臣遺跡　№92」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』文化市民局　2016年
66	-	試掘	古墳時代の竪穴建物・溝・ピット・土坑・谷状遺構、中世の耕作溝を検出。	「Ⅴ-4　中臣遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成30年度』文化市民局　2019年
67	-	試掘	古墳時代前期の竪穴建物を検出。	「Ⅳ-3　中臣遺跡　№124(19N386)」『京都市内遺跡試掘調査報告　令和元年度』文化市民局　2020年
68	山科本願寺跡 19次調査 （既往調査№30）	発掘	平安時代中期の建物・溝・土坑、中世の盛土または整地土を検出。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度』文化市民局　2014年

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所
文化市民局→京都市文化市民局

表７　中臣遺跡　竪穴住居一覧表

	調査次数	中期	Ｖ様式	庄内期	布留期	平面形状	短軸	長軸
1	７次調査Ａ区 10 号住			○		隅丸方形		4.2
2	７次調査Ｃ区 13 号住			○			-	-
3	10 次（D-18）調査３号住居		Ｖ－４，５			隅丸方形		4.7
4	10 次（E-16）調査１号住居		Ｖ－３，４			円形		7.5
5	10 次（E-22）調査２号住居		Ｖ－３，４			方形	6	6.5
6	20 次調査１号住居		○			隅丸方形		5.2
7	20 次調査２号住居		○	○		方形	6.1	6.2
8	20 次調査３号住居		○			隅丸方形	5.3	5.4
9	20 次調査４号住居		○	○		隅丸方形	4.7	4.8
10	20 次調査５号住居		○			方形	5.5	5.65
11	20 次調査６号住居		○			方形	6.15	6.2
12	20 次調査７号住居			○		隅丸方形		4.6
13	20 次調査８号住居			○		方形	5.1	5.15
14	20 次調査９号住居			○		隅丸方形	5	5.3
15	20 次調査 10 号住居			○		隅丸方形		6.6
16	21 次調査 13 号住居		○			円形		8
17	35 次調査１号住		Ｖ－４			方形	6.32	6.5
18	35 次調査２号住		Ｖ－４			方形	6.1	6.1
19	35 次調査３号住					六角形	8.58	8.38
20	41 次調査１号住					隅丸方形	-	-
21	46 次調査１号住			庄内新段階		方形	6.2	6.2
22	48 次調査				布留段階？	方形	4.9+	-
23	49 次調査１号住				布留新段階	方形	5.52	-
24	49 次調査２号住				布留新段階	方形	-	-
25	49 次調査３号住				布留新段階	方形	-	-
26	52 次調査１号住			庄内中		円形	8.2	-
27	52 次調査２号住			庄内		長方形	3.8	4.7
28	52 次調査３号住			庄内		方形	5.7	6
29	52 次調査４号住				布留	長方形	3.4	4.4
30	52 次調査５号住				布留	方形	3.2	-
31	55 次調査１号住			庄内		方形	5.89	6.17
32	56 次調査１号住					方形	5.8	5.8
33	56 次調査２号住					方形	4.6	4.85
34	56 次調査３号住		Ｖ－４			多角	8.2	9.6
35	56 次調査４号住					方形	4.6	5.1
36	56 次調査５号住					方形	6.1	6.9
37	56 次調査６号住					方形	5.4	5.8
38	56 次調査７号住					方形	5.2	-

	調査次数	中期	Ⅴ様式	庄内期	布留期	平面形状	短軸	長軸
39	56 次調査８号住					方形	4.2	4.2
40	56 次調査９号住					方形	5.2	-
41	56 次調査 10 号住					方形	7.2	7.8
42	56 次調査 11 号住					方形	8.8	9.2
43	56 次調査 12 号住					方形	8.1	8.1
44	56 次調査 13 号住					方形	7.2	7.6
45	56 次調査 14 号住					方形	-	-
46	56 次調査 15 号住					方形	6.1	-
47	56 次調査 16 号住					方形	4.2	4.6
48	56 次調査 17 号住					方形	5.4	-
49	56 次調査 18 号住					方形	5.7	6.1
50	56 次調査 19 号住						6.1	-
51	67 次調査１号住					方形	-	-
52	67 次調査２号住					方形	-	-
53	67 次調査３号住					方形	4	4.25
54	67 次調査４号住					方形	5.4	5.8
55	67 次調査５Ａ号住					方形	5.6	6
56	67 次調査５Ｂ号住					方形	5.8	6.2
57	67 次調査６号住					方形	5.2	5.6
58	67 次調査７号住					方形	2.6	3.2
59	67 次調査８号住					五角形	6.6	7
60	70-2 次調査					円形	-	8
61	70-4 次調査１号住					角丸方形	7.2	7.5
62	70-4 次調査２号住					六角	7.7	
63	70-4 次調査３号住					円	7.5	
64	70-4 次調査４号住					円	6.2	6.2
65	70-4 次調査５号住					長方形	4.2	4.6
66	79 次調査 31 号住	Ⅱ様式				円形	5.1	-
67	79 次調査 51 号住					方形	5.2	5.2
68	85 次調査竪穴住居２					方形	4.5	4.5
69	85 次調査竪穴住居 11					方形	4.0+	-
70	85 次調査竪穴住居 14 床面		Ⅴ－３，４			方形	7	7.5

図　　版

調査区全景（東より）

図版２　遺構

１．調査区全景（西から）

２．溝１（東から）

1．溝１　北側掘削状況

2．溝１　南土層断面

図版４　遺構

１．溝１－２、溝２　全景（北西から）

２．溝１－２　土層断面

1．溝２（南西から）

2．溝５（北から）

1．竪穴住居４（北から）

2．竪穴住居４　土層断面（北から）

１．竪穴住居４　床面除去

２．竪穴住居４　土器出土状況　土器①

1．竪穴住居４　土器出土状況　土器③

2．竪穴住居４　土器出土状況　土器②

1．竪穴住居４（北西から）

2．竪穴住居４　床面除去（北西から）

1．下層大溝（北から）

2．下層大溝（東から）

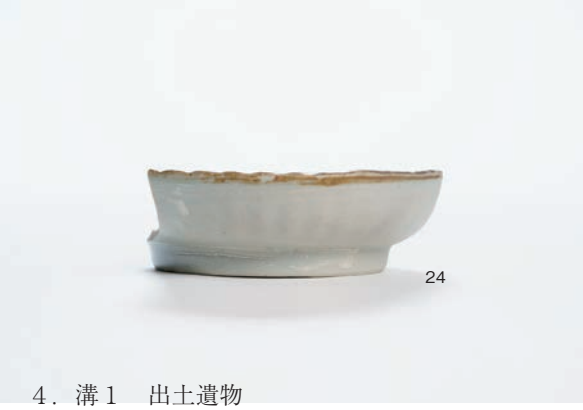
1．下層大溝東肩部　土層断面

2．下層大溝（西から）

1．竪穴住居４　出土遺物１

2．竪穴住居４　出土遺物２

3．竪穴住居４　出土遺物３



4．溝１　出土遺物

5．竪穴住居４　出土遺物４

1．下層大溝・溝１・溝２　出土遺物

2．溝１・溝２近世遺物、表採遺物

報告書抄録

ふりがな	やましなほんがんじあと（じないちょういせき）、さぎちょうまちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	山科本願寺跡（寺内町遺跡）、左義長町遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	和氣清章　中西佳奈江　吉川絵里
編集機関	株式会社 文化財サービス
所在地	〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町８番地
発行所	株式会社 文化財サービス
発行年月日	2024年４月30日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山科本願寺跡（寺内町遺跡）、左義長町遺跡	京都市山科区東野舞台町20・21番地	26100	626 628	34度97分88.9秒	135度80分84.3秒	2023年12月25日～2024年1月26日	210㎡	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山科本願寺跡（寺内町遺跡）、左義長町遺跡	集落	古墳時代 平安時代 室町時代～江戸時代	竪穴住居・溝 流路 溝	古式土師器 土師器 陶磁器 鉄製品	庄内期に属する竪穴住居が調査区東側で1棟確認されたほか、調査区の西側で室町時代から江戸期の区画溝3条が確認された。その下層に平安時代から本願寺造営時の下層流路が確認された。

文化財サービス発掘調査報告書 第31集

山科本願寺跡（寺内町遺跡）、左義長町遺跡発掘調査報告書

発行日　2024年４月30日

株式会社　文化財サービス
編　集　〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町８番地
TEL 075-672-6800

三星商事印刷株式会社
印　刷　〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
TEL 075-467-5151